長岡城跡

―大手通坂之上町地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2021

新潟県長岡市教育委員会

例　言

１．本書は、新潟県長岡市大手通２丁目地内に所在する長岡城跡の発掘調査報告書である。
２．調査は、大手通坂之上町地区第一種市街地再開発事業に伴うものであり、長岡市教育委員会が実施した。
３．遺跡確認調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫及び県費の補助金を受けた。本発掘調査に要した費用は、原因者である独立行政法人都市再生機構が負担した。
４．遺物の注記は、「ＮＯＪ－ＯＳ」の後、出土位置、取り上げ番号等を記した。
５．調査で出土した遺物及び、測量図面・写真等の記録類は、長岡市教育委員会で保管している。
６．調査・整理体制は以下のとおりである。
（確認調査）
調 査 主 体　長岡市教育委員会（教育長　金澤俊道）
事　務　局　長岡市教育委員会科学博物館（館長　小熊博史）
調 査 担 当　長岡市教育委員会科学博物館　係長　鳥居美栄
（本発掘調査）
調 査 主 体　長岡市教育委員会（教育長　金澤俊道）
事　務　局　長岡市教育委員会科学博物館（館長　小熊博史）
調 査 担 当　長岡市教育委員会科学博物館　係長　鳥居美栄
現場代理人　石綿進（株式会社大石組）
発掘調査員　竹部佑介（株式会社大石組）
整理調査員　石坂圭介（株式会社大石組）
調査補助員　田辺美子（株式会社大石組）
７．本書の執筆は、１～３を鳥居が、それ以外を竹部が行った。
８．発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なる御教示・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）
安藤正美　植木・大石建設工事共同企業体

目　次

１　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・１
２　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・２
３　確認調査・・・・・・・・・・・・・・・・３
４　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・４
５　調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・５
６　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・９
引用・参考文献

挿図目次

第１図　遺跡位置図
第２図　長岡城跡の位置及び縄張図
第３図　確認調査トレンチ配置図及び確認調査トレンチ土層柱状図
第４図　グリッド設定図
第５図　土層柱状図

表 目 次

第１表　遺物観察表

図版目次

図版１　調査区全体図
図版２　遺構全体図（１）南区
図版３　遺構全体図（２）北区
図版４　遺構個別図（１）土坑
図版５　遺構個別図（２）外堀跡
図版６　遺物実測図（１）
図版７　遺物実測図（２）
図版８　遺物実測図（３）
図版９　遺物実測図（４）
図版10　遺物実測図（５）
図版11　遺物実測図（６）
図版12　遺物実測図（７）
図版13　遺物実測図（８）
図版14　遺物実測図（９）
図版15　遺物実測図（10）
図版16　遺物実測図（11）
図版17　遺物実測図（12）
図版18　遺物実測図（13）
図版19　調査写真
図版20　遺物写真（１）
図版21　遺物写真（２）
図版22　遺物写真（３）
図版23　遺物写真（４）
図版24　遺物写真（５）
図版25　遺物写真（６）
図版26　遺物写真（７）
図版27　遺物写真（８）

1　調査に至る経緯

新潟県長岡市のＪＲ長岡駅を中心とした地域は、江戸時代には長岡城及びその城下町として栄えた地域である。近年、施設の老朽化や社会状況の変化などを踏まえて複数の市街地再開発事業が進められ、長岡市教育委員会（以下「市教委」という。）は、事業に伴って発掘調査や工事立会などを行っている。

平成23年、本事業の隣接地における再開発事業（大手通表町西地区）について長岡市都市整備部まちなか整備課（当時）と市教委との協議が始まり、その際に本事業地の再開発計画がある場合にも協議、調査が必要であることを確認した。その後、本事業である大手通坂之上町地区第一種市街地再開発事業が本格化する見込みとなり、平成30年４月、長岡市中心市街地整備室と市教委とが協議を行った。市教委は、隣接地の調査で町口門付近の堀跡が確認され、その続きが事業地内に残存している可能性が高いこと、調査の期間を見込んで事業のスケジュールを見込む必要があること、現在や過去の建物躯体の深度が分かる資料があれば示してほしいこと、それらを踏まえて事業者と協議をしたいことなどを伝えた。

平成30年11月、独立行政法人都市再生機構（以下「事業者」という。）と市教委との協議を開始した。事業地の大部分が、過去や現在の利用状況などから遺跡の残存が見込めない箇所であり、それらは調査対象地から除外することとなった。木造建造物部分と、履歴が明らかではない平面駐車場の範囲について調査対象地とし、既存建造物の解体工事の工程と調整して確認調査を実施することとなった。

市教委は、令和２年６月10日付け長教博第82号で文化財保護法第99条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の着手を新潟県教育委員会教育長に報告し、確認調査に着手した。その結果、事業地の一部において堀跡の下部が残存することを確認した。事業者と市教委は本発掘調査の進め方について協議を行い、解体工事の工程と調整して本発掘調査を実施することとなった。

市教委は、令和３年１月29日付け長教博第355号で新潟県教育委員会教育長に対して文化財保護法第99条第１項の規定による発掘調査の着手を報告し、本発掘調査を開始した。

第１図　遺跡位置図（国土地理院1:50,000地形図『長岡』から一部加筆）

2　遺跡の概要

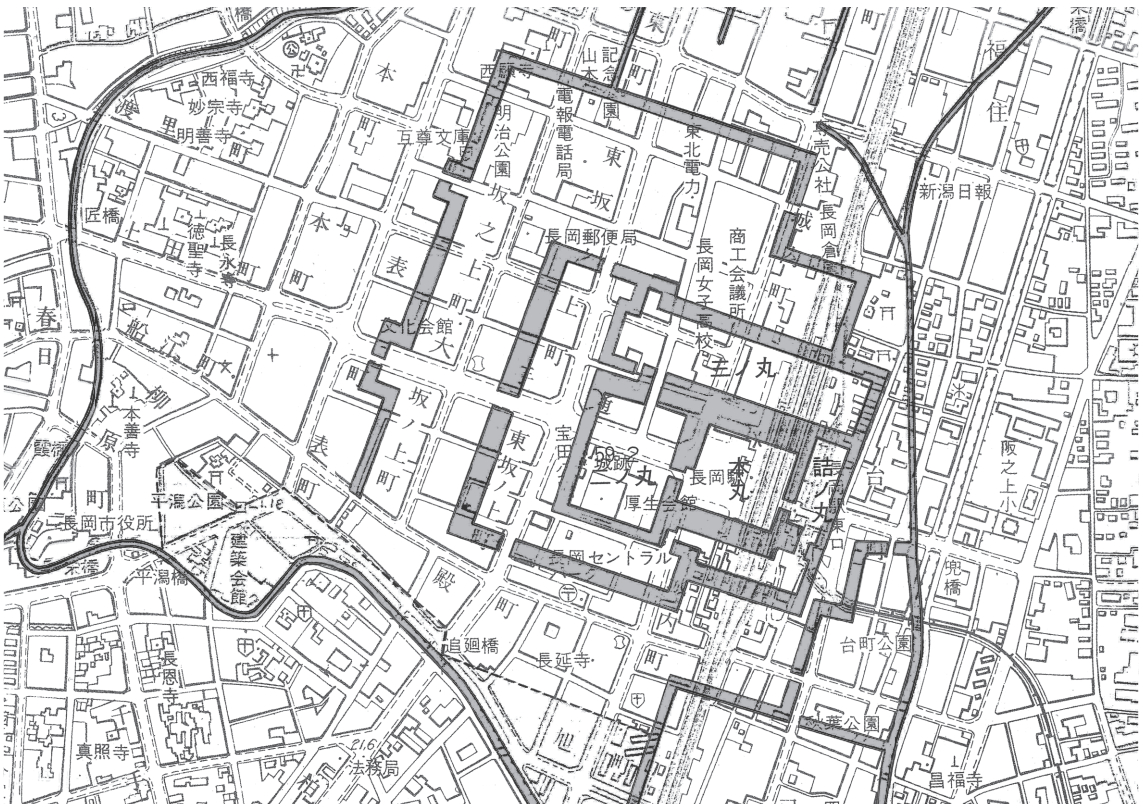
長岡城跡は、新潟県長岡市城内町１丁目ほかに所在する近世城郭遺跡である。

長岡市域のほぼ中央を信濃川が南から北へと貫流し、その両岸には沖積平野が広がる。長岡城跡は信濃川右岸の沖積地に位置し、城跡周辺の標高は約21～22mである。

長岡城跡の北西２㎞ほどの位置に中世の城館跡である蔵王堂城跡がある。その周辺は中世以来、中越の政治・経済の中心的な地域であったが、蔵王堂城は信濃川に近く、川欠などの水害が多かった。そのため、蔵王堂城に在番していた堀直竒が慶長10年（1605）頃から長岡の地に城や町を作り始めたとされる。慶長15年（1610）に直竒が信州飯山へ転封になり、城作りは一時中断されるが、元和２年（1616）に直竒が長岡に戻り再開された。元和４年（1618）に直竒が本庄（村上市）に移封となった後は、代わって長岡に入った牧野忠成（初代長岡藩主）が工事を引き継ぎ、城郭と城下町を完成させた。城は、東の栖吉川と西の信濃川を自然の外郭とし、赤川（柿川）から水を引き込んで内郭に複数の堀を巡らせる。内郭のやや東に偏った位置に本丸があり、本丸の東に詰の丸、南西に二の丸、北に三の丸が配される梯郭式の縄張りである。

長岡城は牧野家による長岡藩政の中心地として約250年間利用されたが、慶応４年（1868）の北越戊辰戦争によって城下町とともに焼失した。明治以降、城跡と城下町の周辺は商工業の中心地となり、土塁や堀は姿を消した。さらに、第二次世界大戦時の長岡空襲からの復興に伴って都市の近代化が進められた。

現在の地表面では堀や土塁などの遺構を確認することはできない。しかし、長岡駅上越新幹線駅舎建設や、今回の事業地に隣接する大手通表町西地区を含む市街地再開発事業などに伴う発掘調査、建造物の建替え時の工事立会などにおいて、部分的にではあるが堀跡の基底部や侍屋敷地の遺構が確認され、また、近世の遺物が出土している。さらに、大手通り地下駐車場建設に伴う発掘調査では二の丸の西堀の基底部の下から中世の井戸跡が確認され、周辺が中世の生活域であったことが確認されている。



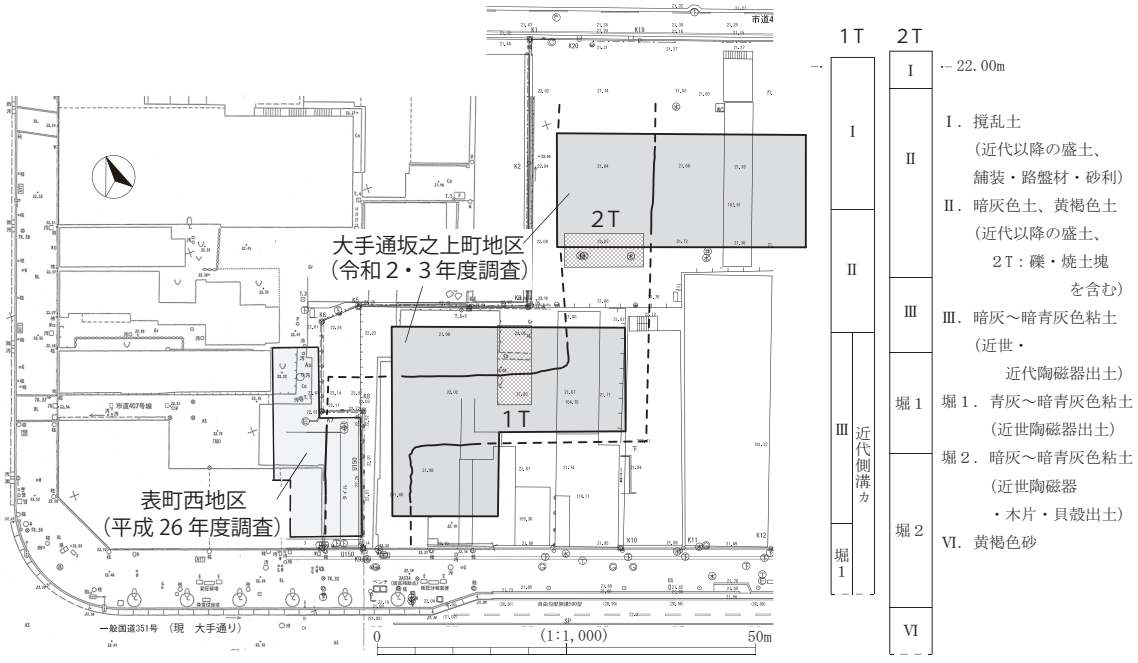
第２図　長岡城跡の位置及び縄張図（S=1/10,000 『新潟県遺跡地図　昭和54年度版』から加筆・転載）

3　確認調査

事業地は、絵図などから長岡城の侍屋敷地と町屋とを区切る町口門の北側周辺から、その東側の侍屋敷地などに当たると推定されている。事業地の大部分は建物の基礎・地下躯体などにより既に破壊されているが、一方、事業地西部分の一角に平面駐車場や、数棟の木造建造物、それらの裏手の空き地となっている箇所がある。その範囲は町口門の周囲を堀が屈曲して通る箇所と推定されており、平成26年度に行った隣接する表町西地区の調査で検出した堀跡の続きが残存している可能性があった。令和２年６月11･12日、堀跡の残存状況を確認するための確認調査を実施した。

空き地部分と駐車場部分の任意の箇所に、それぞれ４ｍ×10mの調査トレンチを設定し、バックホウで掘削を行った。１Ｔを設定した空き地には過去の建築物のコンクリート基礎が残置されており、慎重に除却した後､調査掘削を行った。深さ1.45m付近まで近代以降の盛土と見られる褐色～黄褐色土層があり、基礎除却による掘削は深さ0.8m程度に収まった。盛土層の下には近代陶磁器片を含む暗青灰色粘土層を確認した。盛土層中からこの層まで到達するごみ穴や、焼土粒や炭化物を多く含む部分などがある。深さ1.5m付近において東西方向に走る土管の列とそれを支える横矢板があり、近代の排水施設であろうか。深さ2.45mほどで出土する陶磁器が近代から近世のものになったことから、堀跡の覆土に到達したと判断した。駐車場部分に設定した２Ｔでは、アスファルト舗装、路盤材の下は深さ約1.2mまで暗灰色粘土と黄褐色シルトの混ざった土であり、土中には礫やコンクリート塊、焼土塊などを含む。その下は、近世・近代陶磁器片を含む暗灰色～暗青灰色粘土層になり、深さ2.5m付近で近代の陶磁器は見られなくなる。一部を深掘りし、黄褐色砂層となった深さ約3.5mが堀底に当たると判断した。

以上の結果から、事業地西部分の駐車場部分と空き地部分には堀跡の基底部が残存することが明らかとなった。また、空き地部分に残置されていた基礎の除却の状況から、木造建造物の地下にも堀跡基底部が残存していると見られた。再開発の建築工事が堀跡に影響を与える事業計画であることから、本発掘調査が必要であると判断した。本発掘調査では堀の位置や断面形状、覆土の堆積状況などの様相を明らかにすることを目的に、南区と北区の調査範囲を設定することとした。



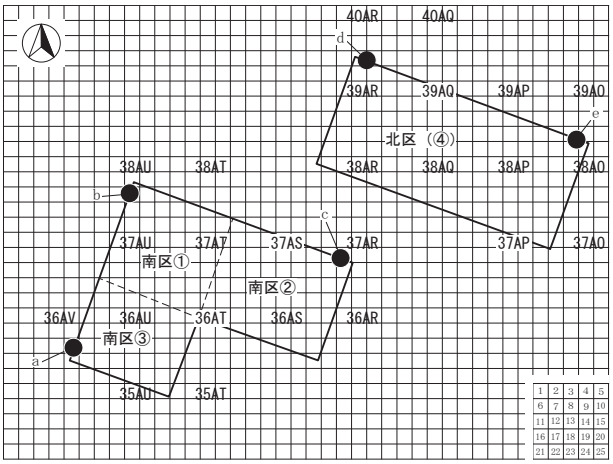
第３図　確認調査トレンチ配置図（S=1/1,000）及び確認調査トレンチ土層柱状図（S=1/40）

４　調査の概要

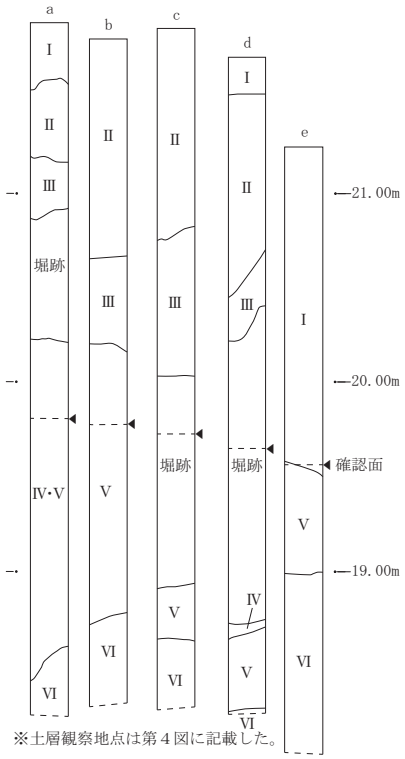
グリッドの設定（第４図）　長岡城跡関連調査では、平成20・21年度実施のシティホール（仮称）整備事業に伴う発掘調査以来、共通したグリッド設定を使用してきた。国土地理院の測量成果2000による平面直角座標第８系（国家座標）を用い１辺10mの大グリッドを設定し、１Ａ（Ｘ＝16440、Ｙ＝31010）を基準とした。表記には算用数字（北に向かい１、２、３……と加算）とアルファベット（基準点１Ａより東に向かいＡ、Ｂ、Ｃ……、西に向かいAA、AB、AC……と呼称）を用いる。大グリッドを２m間隔で25分割し、北西隅を１、南東隅を25とした小グリッドとした。グリッドの範囲は、グリッドの基準から南西側に対象となるグリッドが存在する。

調査の経過　令和３年の冬季は記録的な大雪に見舞われ、１月下旬には調査準備として調査範囲の除雪を行った。２月より発掘調査を開始した。解体工事と並行しての調査であり、掘削土仮置き場所等の用地が限られるため、調査範囲を南北の２地区に分割し、更に南区を①～③の３地点に細分しながら調査を進めた。調査は南区①から始め、次いで３月に南区③、南区②を実施し、最後に④となる北区の調査を行った。調査は地点ごとに重機によるトレンチ掘削を主として行い、検出された堀跡の平面及び断面の記録を適宜行った。掘削土仮置き場の確保に苦慮したため、３月には独立行政法人都市再生機構と協議の上、植木・大石建設工事共同企業体協力の下、掘削土仮置き場の提供を受けつつ掘削土搬出を行い、無事、調査を進めることができた。４月９日には発掘調査を完了し、同月14日に現場の引き渡しを行った。

基本層序（第４・５図）　調査区周囲の現況は、大手通りから北に向かい、標高22m～21m付近で緩やかに傾斜する。全域に渡り近代以降の撹乱を受けており、地点によって撹乱層は深さ２mに達する。Ⅱ層は、焼土粒・炭化物、礫・瓦礫を含み、長岡空襲による影響がうかがえる。Ⅲ層は、Ⅱ層と共に北区（④）の東側を除き広範囲に認められた。南区①では近代の土留工跡が確認された。同層より下位に外堀跡の埋土が堆積することから、近代の整地層と認識した。堀跡は標高20m付近の高さで検出されたが、大手通りに近い南区③のａ地点では、撹乱の影響が比較的浅いことが判明した。Ⅳ層以下は地山であり、上位に砂質シルト（Ⅳ・Ⅴ層）、下位に砂礫層（Ⅵ層）が堆積する。Ⅵ層は地点により標高値に違いはあるものの、東に向かい標高が高くなる傾向がうかがえる。



第４図　グリッド設定図（S=1/1,000）



Ⅰ．撹乱土（近・現代の舗装・路盤材・砂利）
Ⅱ．10YR7/6　明黄褐色粘質シルト
（粘性中、しまり強、焼土粒・炭化物を含む、径10cm礫・瓦礫を多量に含む、撹乱層）
Ⅲ．10YR4/1　褐灰色粘質シルト
（粘性強、しまりやや弱、焼土粒・炭化物を含む、撹乱層）
Ⅳ．5BG6/1　青灰色砂質シルト
（粘性中～やや弱、しまりやや強、地山層）
Ⅴ．10YR6/6　明黄褐色砂質シルト
（粘性弱、しまりやや強、地山層）
Ⅵ．10YR6/6　明黄褐色砂礫　（粘性なし、しまり強、多数の円礫と粗砂で構成される、地山礫層）

第５図　土層柱状図（S=1/40）

5　調査成果

（1）遺構

遺構の概要（図版１～５）　今回の調査では、土坑４基及び長岡城外堀跡を検出した。外堀跡は、大手通り側の一部に杭列がある。調査区は「４　調査の概要」で触れたとおり、深い所では現地表面から２m近くまで近代以降の撹乱があり、遺構検出が困難であった。ただし、撹乱の影響が少ない地点において、近世に帰属年代を求め得る遺構が検出され、部分的ではあるが近世遺構の残存する状況がうかがえた。

今回、遺構検出された標高は南区で19.8～20.0m、北区で19.6～19.7mを測る。調査を進めるにあたり、外堀跡のプランを確定させることを優先し、撹乱の影響が薄くなる深度まで掘削を行い、遺構精査を行った。「４　調査の概要」で述べたⅢ層は近代の整地層と捉えられるが、現地表下70～120cmで検出されており、Ⅰ・Ⅱ層が長岡空襲以後の堆積物と考えると、このⅢ層が近世における地表面であった可能性が考えられる。そのため、今回検出された土坑や外堀跡は本来よりも深く掘り下げた状態で検出されたことに注意されたい。平成26年度実施の表町西地区においては、地表面下の撹乱が著しく外堀跡のプランが不明瞭であったことから、標高19.5m前後まで下げて遺構検出を行っている。

なお、外堀跡の底面まで深さ3.5m程度となることが事前に想定されていたため、調査時は調査区法面の崩落を避けるため、階段状に掘削せざるを得なかった。外堀跡セクションの記録においては、検出面までと検出面下に２分割して記録を行い、整理作業においてそれらを合成した（図版５）。

SK01（図版４）　南区37AS１・２・３・６・７・８・12・13に位置する。Ⅳ層で検出した。平面は円形で、北側は調査区外となる。南区北壁にて現地表面下１mより掘り込みが確認できており、検出面下における断面は弧状だが、本来の掘り込みはU字状であったと考えられる。長軸426cm、短軸（268）cm、検出面からの深さは（10）cmである。覆土は単層で、黒褐色土が堆積する。焼土粒や炭化物を多量に含み、径10～15cmの円礫が混入する。遺物は肥前陶器（10）・肥前磁器（11～13）、銭貨（156）、布が出土した。遺物は全て被熱しており、布は被熱により細片化し炭化している。

SK02（図版４）　南区37AS８・９・10・13・14に位置する。Ⅳ層で検出した。平面は不整な円形、断面は階段状となる。規模は、長軸328cm、短軸（265）cm、深さ76cmである。覆土は６層に分層され、レンズ状に堆積する。１・２層と３～６層では遺構プランが異なり、上下間における切合関係が認められるため、複数回に渡り掘削された可能性が考えられる。遺物の取り上げに際し、覆土上半・下半に分けて記録した。２・５層は炭化物を多量に含み、２・５・６層では木材が含まれる。新旧関係は、SK04及び外堀跡に切られる。遺物は、上半から肥前系陶器（14～19・21～26・28）、越中瀬戸陶器（20）、不明陶器（27）、肥前磁器（29～33）、瓦質土器（34）、土製品（122）、漆器（124・125）、木製品（131～134）、下駄（135・137～139）、金属製品（152・153）、石製品（157・159）が、下半から肥前陶器（36・37）、瀬戸美濃陶器（35）、肥前磁器（38）、瓦質土器（39）、土製品（123）、漆器（126～128）、下駄（138・139）、銭貨（155）が出土した。

SK03（図版４）　南区37AT５に位置する。Ⅳ層で検出した。平面は円形、断面は弧状である。長軸223cm、短軸212cm、確認面からの深さは26cmである。覆土は単層で、黒褐色土が堆積する。しまりが弱く、炭化物や木材を含む。遺物は肥前陶器（40～42）、不明陶器（43）、肥前磁器（44・45）、土器（46）が出土した。

SK04（図版４）　南区37AS８・９・12・13・14・18・19に位置する。Ⅳ層で検出した。平面は不整な円形、断面は弧状である。規模は、長軸475cm、短軸（214）cm、確認面からの深さ20cmである。覆土は４層に分層され、レンズ状に堆積する。褐灰色土を主体とし、３層は炭化物と焼土粒が多量に含まれる。切り合い関係はSK02を切り、外堀跡に切られる。遺物は、肥前陶器（47）、肥前磁器が出土した。

外堀跡（図版５） 南区では、調査区のほぼ中央を東西に横断する形で検出された。南区②及び③の範囲内で屈曲部が検出されており、南区全体では鉤の手状となる。東西方向の主軸方位はＮ－69°－Ｗを向く。断面形状は台形が２段重複した階段状となる。東西方向の長さは（27.3）m、幅はＡ－Ａ’セクション下段で9.4m、深さは確認面から1.6mである。底面は南区①西壁ではⅥ層に達しており標高18.19mであるが、南区②北壁ではⅣ層中で留まっており、標高18.73mと浅くなる。

北区では、調査区の西側で検出された。検出プランは直線的で、Ｎ－20°－Ｗを向く。断面形状は南区と同様に階段状である。幅はＣ－Ｃ’セクション下段で10.7m、深さは確認面から1.71mである。底面はⅥ層に達しており、標高18.06mを測る。

覆土は18層に分層され、レンズ状に堆積する。１～10層と、11～18層は断面形状から上下に分けられ、２・４・５・９層は炭化物を多量に含む。１層はしまりが弱く、人為的に埋め戻された土層と考えられる。３層も礫や木材が多量に含まれ、人為的に埋め戻されたと考えられる。４層は灰白色粘土がラミナ状に堆積しており、滞水状態で一定期間、露出していたと考えられる。５・６層は４層中に見られたラミナ状の堆積がより顕著に分層されたものと理解される。10・11層は層位の乱れが認められることから、人為的に埋め戻されたと捉えられる。13層以下は層厚が薄くレンズ状の堆積が認められることから、滞水状態で一定期間、露出していた可能性が考えられる。切り合いはSK02・SK04を切る。

陶磁器では、１層から近代陶磁器、肥前陶器、肥前磁器（48・104）、２・３層から肥前陶器（49・55・57～59・61～63・65・66・72、106・107・110・111）、瀬戸美濃陶器（108）、越中瀬戸陶器（60）、萩陶器（105）、石見陶器（73）、信楽陶器（50・64）、不明陶器（51・56・67～71）、肥前磁器（52～54、74～98、112・113・115～118）、不明磁器（114）、瓦質土器（99）、４層から肥前磁器（100・101）、11層以下から肥前陶器（119・120）、肥前磁器（102、121）が出土した。

その他、漆器（129・130）、下駄（140・142・143）、金属製品（151・154）、石製品（158・160）が出土した。

杭列（図版５） 南区③では木杭40本が出土した。杭列は町口門寄りの枡形を囲うように、外堀跡に沿って検出された。枡形の西側と北側では杭の打設状況が異なり、西側では杭は２列打設され、北側では１列である。西側の杭列のうち、外堀跡のプラン内に打設されたものは約50cm間隔で、枡形内では約100cm間隔で打設される。枡形の北側の杭列は平均50cm間隔で打設されており、西側で外堀跡に打設された杭列の延長と捉えられる。杭は外堀跡３層ないしはⅣ層に打設されており、検出面より20～30cm上位で折損した状態であった。杭は長いもので150cmあり、先端部はⅥ層に達するものも含まれる。

（２）遺物

遺物の概要 近世陶磁器、瓦質土器、土製品、漆器・木製品、金属製品、石製品が出土した（図版６～18）。陶磁器は浅箱で18箱（約48kg）出土し、出土遺物の主体をなす。次いで漆器・木製品が浅箱で16箱及び杭26本ある。この他に、金属製品・石製品が３箱、布が２箱出土した。表土掘削時や外堀跡１層からは近代陶磁器が多数出土したが、現地において極力、排除した。中世以前の遺物は認められなかった。

近世陶磁器については、陶器は607点31.9kg、磁器は147点16.1kg出土した。調査地点別に集計すると、南区②から最も多く出土しており、陶器は全体の６割弱、磁器は全体の４割強を占める。外堀跡に限らず、４基の土坑から出土した分が含まれるためであり、土坑だけでも陶器は全体の約３割、磁器は１割強を占める。遺物量では、南区①・③の外堀跡からは少量で、北区（④）の外堀跡からは全体の２割強出土しており、外堀跡に限ってみれば、南区より北区の方が遺物密度は高い傾向にある。

漆器・木製品・金属製品・石製品はSK02を中心として南区②に集中する。漆器は７点中６点、木製品

のうち下駄は９点中５点がSK02から出土した。

遺物の記載方法　陶磁器は出土遺構順に記載した。外堀跡は南区と北区に大別した上、層位ごとに報告する。その他の遺物については種別にまとめて報告する。遺物個別の詳細な法量・調整等については観察表に記載した。遺存状況の良好でないものは、法量の欄にカッコ書きで残存法量を記載した。色調は施釉されたものは釉薬の色調を記載した。胎土に特徴的な鉱物が含まれる場合は、その都度、表中にて記載した。なお、報告１～９は確認調査で出土した陶磁器である。詳細は観察表を参照していただきたい。

SK01出土陶磁器　陶器鍋類（10）、磁器鉢・皿（11～13）がある。出土陶磁器は全て被熱しており、変形や熔着、釉薬の発泡が認められる。10は器形が被熱により変形しており、表裏面にタール状の黒色付着物が認められる。11は腰折形、13は白磁で菊型となる。

SK02出土陶磁器　覆土上半では、陶器碗（14～17）、皿（18・19）、向付（20）、鉢（21～22）、擂鉢（23～25）、片口（26）、灯明受皿（27）、甕（28）、磁器碗（29～32）、碗蓋（33）、瓦質土器（34）がある。陶器・磁器共に肥前産が主体で、陶器碗は肥前に限られる。皿は肥前の溝縁皿（18・19）が定量出土した。向付は越中瀬戸（20）が見られる。鉢は肥前のもので、21は胎土目跡があり、22は二彩手の製品である。擂鉢は肥前産を主体とし、須佐の製品（23）が含まれる。28は松樹文が描かれる。磁器碗はくらわんか碗（29～31）が主体的である。32は色絵が施される。碗蓋（33）は青磁染付の製品である。瓦質土器の34は型押しによる獅子頭部であり、火鉢等の一部と考えられる。

覆土下半では、陶器碗（35）、鉢（36）、擂鉢（37）、磁器碗（38）、瓦質土器火鉢（39）がある。35は天目碗の底部である。36・37は肥前の所産である。39は脚部に透孔が認められる。

SK03出土陶磁器　陶器鉢（40）、擂鉢（41・42）、灯明受皿（43）、磁器皿（44）、仏飯器（45）、土器焙烙（46）がある。40は三島手で象嵌が施される。擂鉢41・42は共に貼り付け高台である。磁器は少量で、肥前産のものに限られる。焙烙（46）は外面に煤が付着し、方形に付着が見られない箇所がある。

SK04出土陶磁器　陶器皿（47）がある。肥前の溝縁皿で、被熱する。

外堀跡出土陶磁器　以下、南区、北区に分けて出土層位順に報告する。

南区１層　近代陶磁器が多数含まれる。近世の所産では、磁器碗（48）を図化した。

南区２・３層　陶器碗（55･56）、皿（57･58）、向付（60）、鉢（59）、片口（61）、擂鉢（49･62～66）、灯明受皿（50）、土瓶（67）、鍋（68）、蓋（69･70）、植木鉢（71）、甕（72･73）、施釉軟質陶器皿（51）、磁器碗（74～85）、碗蓋（86）、磁器皿（52～54、87～95）、紅皿（96）、段重（97）、瓶（98）、瓦質土器火鉢（99）がある。外堀跡では３層出土遺物が最も多く、陶器・磁器共に器種も豊富である。肥前産が主体的であり、信楽系の灯明受皿（50）、越中瀬戸の向付（60）や石見の甕（73）といった他産地の製品が稀に含まれる。陶器碗の点数は少ないものの、城下形成時期までさかのぼるもの（55）や、抹茶碗（56）といった特徴的な出土状況が認められる。擂鉢は17世紀前葉と18世紀代に偏りが見られるようであり、19世紀以降まで下る新しい時期のものは認められなかった。磁器では碗類が多く、次いで皿類が出土した。磁器碗はおおむね18世紀以降で、18世紀後葉から19世紀初頭に出土量のピークが認められる。79･80は青磁染付の丸型碗である。82～85は広東碗で、84と85は同意匠のものが出土した。碗蓋は少なく、86の１点のみ確認した。90は青磁染付の皿で稜花、漆継ぎ痕が認められる。93は蛇の目凹形高台で、脚部がある。94は大皿で、内面は見込みに松竹梅文が描かれ、外周部は墨弾きにより文様が施文される。外面は宝文が描かれる。瓦質土器の99は火鉢で、獣脚部が残存する。胴部には型押しによる菊桐文が施される。

南区４層　磁器碗（100）、皿（101）がある。100は半筒形の碗で、内外面に染付が施される。

南区その他　覆土下半（11層以下）では磁器皿（102）があり、覆土一括資料として磁器猪口（103）がある。102は型打により捻花状に成形される。

北区１層　南区同様に近代陶磁器が多数出土した。磁器碗(104)を１点図示した。焼継ぎ痕が認められる。

北区３層　陶器碗（105)、擂鉢（106)、鉢（107)、片口（108)、蓋（109)、瓶（110)、甕（111)、磁器碗（112～114)、皿（115)、蓋物（116・117)、猪口（118）がある。肥前の所産が主体的ではあるが、器種によって他産地の製品が認められる。105は萩焼、108は瀬戸美濃の産である。110は鉄絵による草花文が描かれる。磁器碗では113・114のように広東碗が目立つ印象である。蓋物の116は口縁部が広く釉剥ぎされる。

北区覆土下半　陶器鉢（119)、擂鉢（120)、磁器皿（121）がある。119は口縁部は白泥による波状文と緑釉が施される。120は底部に回転糸切り痕が残る。

土製品　２点出土しており、共にSK02から出土した。122はSK02の覆土上半より出土した。磁器製で外面には色絵が施される。型押しによる人物像であり、中空に成形される。123は芥子面である。SK02覆土下半から出土した。表面は剥離する。

漆器　碗３点（124・129・130)、蓋３点（125・126・127)、盆１点（128）がある。124・125はSK02覆土上半、126～128はSK02覆土下半から出土した。129・130は外堀跡からの出土である。124は外面に「丸に三つ引き」が施文される。126は外面に「丸に木瓜」があり、つまみ内部に草花文が描かれる。127は全面に草花文が描かれる。128は厚手の盆で、口縁部に赤色漆が塗布される。129は３層出土、胴部内外面とも赤色漆で、高台内に黒色漆が施される。130は５層出土、外面に「丸に片喰」が描かれる。

木製品　箸（131･132)、加工材（133)、燭台（134)、下駄（135～143)、杭（144～150）がある。木製品のうち、箸・加工材・燭台は全てSK02覆土上半から出土した。131は片端部が折損する。132・133は両端部が残存する。加工痕は不明瞭である。134は辺材を用いる。端部は折損する。

下駄は９点あり、135・137～139はSK02覆土上半、136はSK02覆土下半、140・142・143は外堀跡、141は撹乱層から出土した。種類としては、連歯下駄（137・143)、刳り下駄（138・141)、差歯下駄のうち露卯のもの（135)、陰卯のもの（136・140)、無歯下駄（139・142）がある。135は黒色漆が塗布される。137は大きく欠損する。138は無眼のものである。139は踵部が欠損する。140は歯が欠損する。142は踵部に格子目状の刻みが施される。143は踵部が欠損する。

杭は40点出土したうち状態の良好なもの26点を取り上げ、７点（144～150）を図示した。全て樹皮のある芯持丸太材である。145は先端部断面が一部炭化する。146は打設時の衝撃で先端部が割けている。148は腐食が進んでおり、先端部が不明瞭であった。

金属製品　農具（151・154)、釘（152)、煙管（153)、調度等不明品があり、農具、釘、煙管を図示した。151は鎌とした。刃部は欠損しており、柄込み付近が残存する。152は平折釘である。断面方形で、湾曲している。153は煙管の雁首で、火皿は欠損している。脂返しが細く湾曲する。側面に蝋着痕が残る。154は風呂鍬であり、風呂側がゆがむ。

銭貨　２点（155・156）ある。２点とも新寛永で、155はSK02覆土下半、156はSK01から出土した。

石製品　碁石（157)、硯（158)、礎石（159)、樋（160）がある。碁石157は頁岩製である。SK02覆土上半より出土した。硯158は粘板岩製で、表面に擦痕が見られ、墨痕が残る。159は礎石とした。角閃石安山岩製で、角閃石の斑晶が目立つ。方形に加工されており、表裏側面は整形痕が残る。160は形状から樋としたが、大部分は欠損しており、全体像は不明である。方形に加工されており、側面及び端面は研磨され平滑である。内面はノミ状工具による加工痕が明瞭に残る。

6　まとめ

本調査では、町口門付近の枡形に伴う、鉤の手状に張り出した外堀跡を検出した。表町西地区（平成26年度調査）の成果と合わせ、図版１で示したとおり、周辺街区における長岡城跡の平面プランを部分的ではあるが復元できたことが、本調査の成果と言える。

表町西地区の調査においても断面形状から確認できたように､外堀跡の断面形状は階段状である。今回、覆土の堆積状況を再検討した所、外堀跡は底面が細いプランが先行し、底面が広いプランへと改修された状況が判明した。覆土下半にあたる11層以下からは、18世紀後半を下限とした遺物が出土しており、外堀の改修をその頃に求め得る。外堀跡に切られるSK02・SK04は18世紀後半までには収まり、19世紀代の遺物が含まれる覆土３層よりは先行する。これら土坑の年代も、外堀の改築年代を示唆する。該当する時期において､外堀の改修を必要とする契機となる出来事と言えば､享保13年（1728）の三蔵火事が想起される。柳原町の三蔵により引き起こされた長岡藩最大の火災とされ、長岡城本丸・二の丸・三の丸、家中屋敷・町家等約1,500軒が焼失したと伝えられる（長岡市編1993)。城下では、この後も元文５年（1740)、宝暦６年（1756）など、度重なる火災に悩まされている。これら大火を契機として改修が行われた可能性を考慮すべきであろう。加えて、SK02からは５点の下駄が出土し、下駄が集中している様子がうかがえた。三蔵火事が雪駄のことを怨恨として引き起こされた（長岡市編1931）とされている点に注視したい。三蔵火事そのものによる廃棄土坑とまでは限定できないものの、履物をまとめて投棄する理由付けの一つになった可能性が示唆される。SK01・SK04で顕著に見られたように、火災に伴う廃棄土坑が検出された点にも注目しておきたい。先述の度重なる火災の後、周知のとおり、俊治火事、戊辰戦争、長岡空襲と長岡市街は現代に至るまで度重なる大火に見舞われてきた。現時点では年代を特定し得ないものも含まれるが、今回検出された土坑は、近世におけるいずれかの火災に伴うものと位置づけられる。なお、表町西地区でも同様に廃棄土坑が検出されており（SX1)、これらは全て城郭の外側に所在する。今回の調査においても城郭の内側では土坑など遺構を検出できなかった点からも、災害復旧における土地利用のあり方をうかがうことができるのではないだろうか。

さて、外堀跡の２・３層は近代遺物をほぼ含まず、19世紀初頭までの遺物を中心として、19世紀半ば頃までの遺物が含まれる。近代における長岡市街の変遷をうかがうに、表町西地区調査でも触れたように、明治11年（1878）発行の『長岡みやげ』（互尊文庫蔵）においては痕跡的に外堀跡が水路として確認できる（斎藤1978・竹部2015)。その後の市街地図では外堀跡の描写が見られないことから、２・３層は『長岡みやげ』までには埋設されていた可能性が高い。南区①西壁Ⅲ層で検出された土留工跡は、近代に至り水路化した一部と捉えられる。

上記のとおり、長岡城下における災害復旧と近代化の中で、外堀跡の消長の一端をうかがい知ることができた。遺構の検出状況からは、現大手通り側における外堀跡の遺存状況が良好であること、遺構は検出できなかったものの、枡形のプランは残存することから、大手通り直下など、近世遺構の遺存する地点が残る可能性が考えられる。今後の調査事例の増加によって、城下の変遷や人々の生活の一端が明らかになることを期待する。

引用・参考文献

相羽重徳　2010 「新潟県における近世擂鉢の流通Ⅰ（上越編）」『三面川流域の考古学』第８号　奥三面を考える会
相羽重徳ほか　2012 「新潟県における近世擂鉢の流通Ⅱ（佐渡・三島郡・古志郡編）」『三面川流域の考古学』第10号　奥三面を考える会
木村孝一郎　2008 「越前焼の編年的研究ノート」『吾々の考古学』 和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年―九州近世陶磁学会10周年記念―』 九州近世陶磁学会
小泉　弘　2001a 「Ⅵ江戸の生活文化２喫茶・飲酒・喫煙　喫煙２煙管」『図説江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編　柏書房
小泉　弘　2001b 「Ⅵ江戸の生活文化３衣文化　履物２下駄」『図説江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編　柏書房
駒形敏朗　1987 『長岡城跡発掘調査（城内ビル）』 長岡市教育委員会
駒形敏朗　1997 『長岡城跡発掘調査報告書―大手通り地下駐車場建設―』 長岡市教育委員会
斎藤茂吉　1978 「長岡城跡と大手通り」『長岡郷土史』第16号　長岡郷土史研究会
竹部佑介　2015 「７まとめ」『長岡城跡　―大手通表町西地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』 長岡市教育委員会
鳥居美栄ほか　2010 『長岡城跡（厚生会館地区）　―シティホール（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』 長岡市教育委員会
鳥居美栄ほか　2010 『長岡城跡　―長岡駅大手口地下自転車駐車場等建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』 長岡市教育委員会
鳥居美栄ほか　2015 『長岡城跡　―大手通表町西地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』 長岡市教育委員会
長岡郷土史研究会編　1982 『長岡の古地図　その１』 長岡郷土史研究会
長岡郷土史研究会編　2002 『長岡の古地図　その２』 長岡郷土史研究会
長岡市編　1931 『長岡市史』 長岡市
長岡市編　1986 『ふるさと長岡のあゆみ』 長岡市
長岡市編　1993 『長岡市史』資料編２古代・中世・近世一　長岡市
藤澤良祐ほか　2006 『江戸時代のやきもの―生産と流通―』 財団法人瀬戸市文化振興財団

第１表　遺物観察表

(1) 陶磁器

図版No.	遺物No.	出土位置	遺構	層位	産地	種別	器種	法量（cm）			口径残存率（●/36）	底径残存率（●/36）	施釉等	胎土色	胎土含有物	文様・調整等（外/内）	備考
								口径	器高	底径							
6	1	試掘1T			肥前	磁器	碗	6.7	5.7	3.8	21	36	透明釉、染付	白	黒粒並	削り出し高台	
6	2	試掘1T			肥前	磁器	碗		(4.7)	6.2		35	透明釉	灰白	黒粒多	削り出し高台	高台砂付着 圏線(内)1条
6	3	試掘1T			肥前	磁器	碗	11.0	(6.6)	6.1	18	29	透明釉、染付	白	黒粒多	削り出し高台	圏線(外)2条(内)3条
6	4	試掘1T			肥前	磁器	皿	14.9	(3.4)		9		透明釉、染付	白	黒粒多		輪花、圏線(外)1条(内)2条
6	5	試掘2T			肥前	陶器	碗		(4.4)	5.4		32	透明釉	灰白	砂少	削り出し高台	
6	6	試掘2T			肥前ヵ	陶器	碗	8.4	5.3	4.1	9	13	鉄釉(灰オリーブ)	灰白	礫少	削り出し高台	被熱
6	7	試掘2T			不明	陶器	鍋	23.0	(3.2)		6		鉄釉(暗赤褐)	橙	砂少		外面煤付着
6	8	試掘2T			肥前	磁器	碗		(2.3)	4.4		36	青磁釉(オリーブ灰～緑)・透明釉、染付	灰白	黒粒多	削り出し高台	外面ケズリ
6	9	試掘2T			肥前	磁器	碗	11.2	6.0	4.4	8	34	透明釉、染付	白	黒粒並	削り出し高台	高台内裏銘あり「宣明年製」 圏線(外)3条
6	10	37AS1 37AS7	SK01	覆土	肥前	陶器	鍋類	13.8	(10.4)		1		灰釉(灰)	褐灰	精良		被熱、変形、付着物あり
6	11	37AS1	SK01	覆土	肥前	磁器	鉢	18.2	5.3	10.2	5	9	透明釉、染付	白	黒粒並	削り出し高台	高台内裏銘あり 圏線(外)2条(内)4条 高台内圏線2重
6	12	37AS2	SK01	覆土	肥前	磁器	皿		(2.4)				透明釉、染付	白	黒粒少		蛇花 被熱
6	13	37AS2 37AS7	SK01	覆土	肥前	磁器	皿		(2.8)	7.9		8	透明釉	白	黒粒多	削り出し高台、型打ち	輪花24弁
6	14	37AS9	SK02	覆土上半	肥前	陶器	碗	7.6	3.7	3.3	24	36	灰釉(灰白)	灰白	砂並		底部回転糸切り
6	15	37AS9	SK02	覆土上半	肥前	陶器	碗	10.6	5.4	3.8	1	8	白泥・透明釉	灰赤	精良	削り出し高台	
6	16	37AS9	SK02	覆土上半	肥前	陶器	碗	9.9	7.0	4.3	4	13	白泥・透明釉	灰黄褐	精良	削り出し高台	
6	17	37AS9	SK02	覆土上半	肥前	陶器	碗	9.7	6.8	4.5	3	13	透明釉	淡黄	砂少	削り出し高台	
6	18	37AS9	SK02	覆土上半	肥前	陶器	皿	14.4	(2.5)		4		透明釉	灰白	砂少		
6	19	37AS8	SK02	覆土上半	肥前	陶器	皿	13.8	(3.1)		7		透明釉	灰白	砂少		
6	20	37AS9 37AS10 －	SK02 SK02 表土	覆土上半 覆土上半 撹乱	越中瀬戸	陶器	向付	11.4	(2.9)	5.4	16	6	鉄釉(暗赤褐)・灰釉（浅黄）	浅黄橙	砂並、礫多、長石	削り出し高台	
7	21	37AS9 37AS9・10	SK02	覆土上半 覆土下半	肥前	陶器	鉢		(5.4)	8.8		20	灰釉(灰オリーブ)、鉄絵	灰白	砂並、礫少	削り出し高台	見込み:胎土目4ヶ所
7	22	37AS9・10 37AS9 37AS10	SK02 SK02 SK02	覆土下半 覆土上半 覆土下半	肥前	陶器	鉢	38.0	(9.6)		12		白泥・鉄釉(褐)	橙	砂少、礫 少、白粒		
7	23	37AS9	SK02	覆土上半	須佐	陶器	擂鉢	32.2	(5.6)		3		錆釉(橙～にぶい赤褐)	浅黄橙	砂並、礫少		櫛目1単位10条
7	24	37AS8	SK02	覆土上半	肥前	陶器	擂鉢	28.0	(4.3)		3		鉄釉(暗赤灰)	橙	砂並、礫少		
7	25	37AS10	SK02	覆土上半	肥前	陶器	擂鉢		(10.0)	10.4		36	－	灰	砂多、礫少	ロクロケズリ	櫛目1単位7条 外面降灰 底部ヘラ切り痕
7	26	37AS9	SK02	覆土上半	肥前	陶器	片口	15.1	(3.8)		5		鉄釉(暗赤褐)	にぶい橙	砂少		
7	27	37AS9	SK02	覆土上半	不明	陶器	灯明受皿	10.9	(3.2)		5			灰	精良		
7	28	37AS10	SK02	覆土上半	肥前	陶器	甕	19.3	(6.9)		3		白泥(灰白)・透明釉、鉄絵	灰褐	砂並		頸径18.5cm
7	29	37AS9	SK02	覆土上半	肥前	磁器	碗	10.6	(4.9)		9		透明釉、染付	白	黒粒並		
7	30	37AS9	SK02	2層	肥前	磁器	碗	11.4	6.3	4.7	8	18	透明釉、染付	白	黒粒多	削り出し高台	高台砂付着 圏線(外)4条
7	31	37AS9	SK02	覆土上半	肥前	磁器	碗	10.8	6.1	4.5	13	36	透明釉、染付	灰白	黒粒少	削り出し高台	圏線(外)2条、裏銘あり 高台内圏線1重
7	32	37AS9	SK02	覆土上半	肥前	磁器	碗	9.0	(4.3)		7		透明釉、色絵(赤・緑・黒)	白	黒粒並		
7	33	37AS10	SK02	覆土上半	肥前	磁器	碗蓋	9.0	3.0		12	12	青磁釉（明オリーブ灰)・透明釉、染付	灰白	黒粒少	ロクロケズリ	つまみ径3.7cm、圏線(内)2条 内面：コンニャク印判 五弁花
7	34	37AS9	SK02	覆土上半	不明	瓦質土器	火鉢ヵ							灰白	砂多、礫少	型押し	表面キラコ雲母
8	35	37AS9	SK02	覆土下半	瀬戸美濃	陶器	碗		(1.5)	5.3		18	天目釉(黒)	灰白	精良、黒粒	削り出し高台	被熱
8	36	37AS9・10	SK02	覆土下半	肥前	陶器	鉢	27.6	9.4	11.2	7	21	白泥・灰釉(赤～褐灰)	赤	砂並、礫少	削り出し高台	
8	37	37AS10	SK02	覆土下半	肥前	陶器	擂鉢	25.4	(3.2)		3		鉄釉(暗赤褐)	灰	砂並		櫛目単位不明
8	38	37AS9	SK02	覆土下半	肥前	磁器	碗	10.7	(4.8)		9		透明釉、染付	白	黒粒並		
8	39	37AS9 37AS9 37AS9・10 37AS10	SK02	覆土上半 覆土下半 覆土下半 覆土下半	不明	瓦質土器	火鉢		(18.1)	26.1	9		－	灰白	砂多、海綿骨針、金雲母		高台部穿孔2箇一対 6ヵ所あり

図版No.	遺物No.	出土位置	遺構	層位	産地	種別	器種	法量（cm）			口径残存率（●/36）	底径残存率（●/36）	施釉等	胎土色	胎土含有物	文様・調整等（外/内）	備考
								口径	器高	底径							
8	40	37AT5	SK03	覆土	肥前	陶器	鉢	39.4	(5.0)		3		白泥・透明釉	赤褐	砂並、礫少、白粒		
8	41	−	SK03	覆土	肥前	陶器	擂鉢		(10.5)	15.0		8	鉄釉（赤黒）	赤	砂並	貼り付け高台	櫛目1単位12条
8	42	37AT5 −	SK03	覆土	肥前	陶器	擂鉢	37.8	16.2	18.6	6	10	鉄釉(にぶい赤褐～橙)	明赤褐	砂並、礫少、白粒		櫛目1単位8条 被熱
8	43	−	SK03	覆土	不明	陶器	灯明受皿		(2.6)	4.4		12	鉄釉(にぶい赤褐～暗赤褐)	浅黄橙	砂少、礫少、長石		底部回転糸切り
9	44	37AT5	SK03	覆土	肥前	磁器	皿	13.4	3.9	7.9	14	20	透明釉、染付	灰白	黒粒多	削り出し高台	圏線(外)1条(内)2条 高台内圏線1重 見込み：コンニャク印判 五弁花 裏銘あり
9	45	−	SK03	覆土	肥前	磁器	仏飯器	7.2	4.8	3.9	6	31	透明釉、染付	灰白	黒粒並		
9	46	37AT5 −	SK03	覆土	不明	土器	焙烙	29.8	(7.4)		12		−	橙	砂多、礫多		外面煤付着
9	47	37AS13	SK04	覆土	肥前	陶器	皿	12.5	3.2	4.8	8	12	灰釉(明オリーブ灰～灰白)	灰白	砂少	削り出し高台、ケズリ	見込み:砂目跡3ヶ所 内面・高台内・外面砂付着あり 被熱
9	48	37AT14	外堀跡	1層	肥前	磁器	碗	9.9	5.9	5.6	10	18	透明釉、染付	白	黒粒並	削り出し高台	圏線(外)2条(内)3条
9	49	37AU19	外堀跡	2・3層	肥前	陶器	擂鉢		(6.9)	16.2		7	鉄釉(暗赤灰)	橙	砂並、礫少、白粒	叩き成形、貼り付け高台	内面重ね焼き痕 内面櫛目
9	50	37AU19	外堀跡	2層	信楽	陶器	灯明受皿	10.8	1.9	3.9	6	13	透明釉	灰白	砂並、礫少		外面重ね焼き痕
9	51	37AT10	外堀跡	2層	不明	陶器	皿	29.2	5.9	17.9	1	5	鉄錆(橙)	淡黄	砂並、礫少	ケズリ	軟質施釉陶器
9	52	37AU19	外堀跡	2・3層	肥前	磁器	皿	18.6	4.1	9.4	5	8	透明釉、染付	灰白	黒粒並	削り出し高台	見込み:蛇ノ目釉剥ぎ 高台砂付着
9	53	37AU19	外堀跡	2層	肥前	磁器	皿	13.6	3.2	8.6	3	15	透明釉・青磁釉(明緑灰)	白	黒粒多	削り出し高台	高台内裏銘あり「□□成□□製」
9	54	38AU5	外堀跡	2層	肥前	磁器	皿	10.2	2.8	5.2	11	18	透明釉、染付	灰白	黒粒並	削り出し高台	
10	55	37AS11	外堀跡	3層	肥前	陶器	碗	9.7	6.0	4.4	6	18	灰釉(オリーブ灰)	灰白	砂多	削り出し高台	高台・高台内砂付着 外面ロクロケズリ
10	56	37AS20	外堀跡	3層	不明	陶器	碗	12.8	7.1	(5.7)	16	24	灰釉(灰白～オリーブ黄)	灰白	砂少	削り出し高台	畳付砂付着、焔着痕あり
10	57	37AT8・9	外堀跡	3層	肥前	陶器	皿		(1.6)	5.6		36	長石釉(褐灰)	赤	砂少	削り出し高台	見込み：砂目跡3ヶ所 高台内砂付着
10	58	37AS15	外堀跡	3層	肥前	陶器	皿		(2.2)	4.3		36	灰釉(灰オリーブ)	灰白	砂少	削り出し高台	畳付糸切り痕 見込み:砂目跡4ヶ所
10	59	37AS20	外堀跡	3層	肥前	陶器	鉢		(3.8)	7.8		12	灰釉(灰オリーブ～オリーブ黄)	黄灰	砂並、礫少	削り出し高台	切高台 外面・高台接地面砂付着 見込み:砂目跡
10	60	37AS15 −	外堀跡 外堀跡	3層 覆土	越中瀬戸	陶器	向付	11.3	2.8	5.8	34	20	鉄釉(暗赤褐～黒褐)・灰釉（浅黄）	浅黄橙	砂並、礫並、長石	削り出し高台	見込み:押印（花）
10	61	37AU14・15	外堀跡	3層	肥前ヵ	陶器	片口	17.0	(6.8)		3		灰釉(オリーブ黄～浅黄)	灰白	黒粒並	ロクロケズリ	
10	62	37AS13	外堀跡	3層	肥前	陶器	擂鉢	27.4	(4.1)		3		鉄釉(暗赤褐)	橙	砂多、礫少	内面：櫛目（横位）	
10	63	37AS11・12	外堀跡	3層	肥前	陶器	擂鉢		(7.3)				鉄釉(赤黒～暗赤灰)	にぶい赤褐	砂少、礫並		
10	64	37AS10	外堀跡	3層下半	信楽	陶器	擂鉢		(4.9)				−（にぶい黄橙～にぶい赤褐）	灰	礫多、長石		櫛目1単位6条
10	65	37AS12	外堀跡	3層	肥前	陶器	擂鉢		(11.8)	9.5		12	−	橙	砂並、礫並	ロクロケズリ	櫛目1単位12条
10	66	37AS13 37AS9	外堀跡 SK02	3層 覆土下半	肥前	陶器	擂鉢		(13.1)	11.4		23	鉄釉(橙)	橙	砂並、礫並		櫛目1単位7条
11	67	37AS11・12	外堀跡	3層	不明	陶器	土瓶		(8.6)				灰釉(灰オリーブ)	褐灰	砂少	ケズリ	
11	68	37AU14	外堀跡	3層	不明	陶器	鍋		(5.1)	8.0		17	鉄釉(暗赤褐)	橙	砂少	ケズリ	外面煤付着
11	69	37AS9	外堀跡	3層	不明	陶器	蓋	10.6	2.8		23		鉄釉(にぶい赤褐)	灰	砂少		受径9.1cm、つまみ径2.4cm
11	70	37AT6	外堀跡	3層	不明	陶器	蓋	12.3	3.1		13		鉄釉(灰褐)	にぶい黄橙			つまみ径2.7cm
11	71	37AT8・9	外堀跡	3層	不明	陶器	植木鉢	16.5	8.4	8.2	11	19	灰釉(暗オリーブ灰～にぶい赤褐)	橙	砂多、礫少	削り出し高台、ケズリ	
11	72	37AS20	外堀跡	3層	肥前	陶器	甕	32.4	(12.1)		1		鉄釉(暗赤灰～灰赤)	暗褐	砂並、礫少	叩き成形、ヨコナデ	
11	73	37AS14	外堀跡	3層	石見	陶器	甕		(2.9)	15.0		26	鉄釉(暗赤褐)	淡黄	砂並・礫並 長石		底面墨書
11	74	37AT3・8	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗	8.6	(6.0)		4		透明釉、染付	白	黒粒多		漆継ぎ
11	75	37AS20	外堀跡	3層	肥前	陶器	碗	11.0	6.0	4.6	10	36	透明釉、染付	灰白	黒粒並	削り出し高台	
11	76	37AS19	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗	7.3	(4.6)		16		透明釉、染付	白	黒粒少		
11	77	37AS11・12	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗	10.2	(3.8)		9		透明釉、染付	白	黒粒並		
11	78	37AS19	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗	9.4	5.2	4.2	30	36	透明釉、染付	灰白	黒粒並	削り出し高台	高台砂付着、圏線(外)2条
11	79	37AS20	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗	10.8	6.5	4.3	24	20	透明釉・青磁釉(灰白)、染付	白	黒粒多	削り出し高台	見込み:コンニャク印判 五弁花 圏線(内)2条
11	80	37AS12 −	外堀跡	3層 覆土	肥前	磁器	碗	10.8	5.8	4.3	4	32	透明釉・青磁釉(明オリーブ灰～緑)、染付	白	黒粒少	削り出し高台	高台内裏銘あり 圏線(内)2条 見込み：コンニャク印判 五弁花 漆継ぎ

図版No.	遺物No.	出土位置	遺構	層位	産地	種別	器種	法量（cm）			口径残存率（●/36）	底径残存率（●/36）	施釉等	胎土色	胎土含有物	文様・調整等（外/内）	備考
								口径	器高	底径							
11	81	37AT8・9	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗	11.7	(5.0)		17		透明釉、染付	白	黒粒並		
12	82	37AS10	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗		(5.1)	5.9		32	透明釉、染付	灰白	黒粒少	削り出し高台	圏線(外)2条(内)1条 高台内漆付着
12	83	37AT3	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗	11.2	6.2	6.3	14	17	透明釉、染付	白	黒粒並	削り出し高台	圏線(外)1条 見込み：銘あり
12	84	37AU14・15 37AU5	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗	11.4	6.3	7.0	31	30	透明釉、染付	白	黒粒少	削り出し高台	圏線(外)1条(内)3条
12	85	37AT8・13	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗	11.2	6.4	6.7	17	36	透明釉、染付	白	黒粒少	削り出し高台	圏線(外)1条(内)3条
12	86	37AT3・8	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗蓋	9.2	2.6		19		透明釉、染付	白	黒粒並		圏線(外)2条(内)2条 つまみ内圏線1重、つまみ径3.9cm、つまみ内銘あり
12	87	37AS11	外堀跡	3層	肥前	磁器	皿	10.0	2.1	5.9	7	23	透明釉、染付	灰白	黒粒多	削り出し高台	圏線(外)2条、見込み：五弁花
12	88	37AU9・10	外堀跡	3層	肥前	磁器	皿		(1.5)	6.3		36	透明釉、染付	白	黒粒並	削り出し高台	高台内裏銘あり 圏線(外)3条、高台内圏線1重
12	89	37AS15	外堀跡	3層	肥前	磁器	皿	13.2	3.9	8.0	18	25	透明釉、染付	灰白	黒粒並	削り出し高台	高台内裏銘あり 見込み：コンニャク印判五弁花 圏線(外)3条(内)2条 高台底部圏線1重
12	90	37AU5	外堀跡	3層	肥前	磁器	皿	16.6	(3.4)		8		透明釉・青磁釉(明緑灰)、染付	白	黒粒少		蛸花、焼継ぎ痕、被熱
12	91	37AU19	外堀跡	3層	肥前	磁器	皿	11.2	2.5	6.2	15	21	透明釉、染付	白	黒粒並	削り出し高台、型打ち	平面八角形
12	92	37AU24	外堀跡	3層	肥前	磁器	皿		(4.5)				透明釉、染付	白	黒粒少		破断面に漆継ぎ痕あり
12	93	37AS14	外堀跡	3層	肥前	磁器	皿		(3.4)	11.0		11	透明釉、染付	浅黄橙	黒粒並	蛇ノ目凹形高台	脚貼り付け
13	94	37AT9	外堀跡	3層	肥前	磁器	皿		(2.4)	15.1		9	透明釉、染付	灰白	黒粒並	削り出し高台	圏線(外)3条、裏銘「富貴長春」 高台底部圏線1重 底部ハリ目跡4ヶ所
13	95	37AT8・9	外堀跡	3層	肥前	磁器	皿	21.3	7.0	13.1	11	9	透明釉、染付	灰白	黒粒多	蛇ノ目凹形高台	圏線(外)3条(内)3条
13	96	37AT8・9	外堀跡	3層	肥前	磁器	紅皿	6.0	1.6	4.2	31	36	透明釉、染付	白	黒粒少	削り出し高台、型打ち	蛸花
13	97	37AT2	外堀跡	3層	肥前	磁器	段重	12.2	4.9	7.8	2	10	透明釉、染付	白	黒粒並	削り出し高台	圏線(外)3条
13	98	37AT3	外堀跡	3層	肥前	磁器	瓶		(12.3)				透明釉、染付	白	黒粒多		
13	99	37AS11・12	外堀跡	3層	不明	瓦質土器	火鉢		(11.0)			7	－	灰白	砂少、長石	型押し、ヨコナデ	脚部穿孔あり
13	100	37AR16	外堀跡	4層	肥前	磁器	碗	7.6	6.9	3.8	8	11	透明釉、染付	白	黒粒多	削り出し高台	圏線(外)2条 見込み：圏線2重
13	101	37AS20	外堀跡	4層	肥前	磁器	皿	13.1	1.9	7.3	4	5	透明釉、染付	白	黒粒多	削り出し高台	高台砂付着 圏線(外)3条、高台内圏線1重
14	102	37AU20 －	外堀跡	覆土下半 覆土	肥前	磁器	皿	13.6	3.2	6.1	18	36	透明釉、染付	灰白	黒粒並	削り出し高台、型打ち	高台砂付着 輪花18弁
14	103	－	外堀跡	覆土	肥前	磁器	猪口		(5.4)	4.9		13	透明釉、染付	白	黒粒少	削り出し高台	高台内裏銘あり
14	104	38AQ4	外堀跡	1層	肥前	磁器	碗		(5.0)	3.8		25	透明釉、染付	白	黒粒少	削り出し高台	圏線(外)2条(内)2条 焼継ぎ痕
14	105	39AR19	外堀跡	3層	萩	陶器	碗	12.4	6.3	4.8	5	9	灰釉(明黄褐～灰黄)	灰白	砂少	削り出し高台	
14	106	39AR19	外堀跡	3層	肥前	陶器	擂鉢		(6.4)	13.6		18	鉄錆(極暗赤褐)	にぶい赤褐	砂少	貼り付け高台	輪状の重ね焼き痕 櫛目1単位12条
14	107	39AR25	外堀跡	3層	肥前	陶器	鉢		(6.2)	14.4		16	鉄釉(赤褐)・白泥	赤褐	砂並、礫少	削り出し高台 ロクロケズリ	
14	108	39AR18	外堀跡	3層	瀬戸美濃	陶器	片口	13.6	9.2	8.0	19	33	鉄釉(暗赤褐～オリーブ黒)	灰褐	砂多、礫並	削り出し高台、ケズリ	
14	109	39AR18	外堀跡	3層	肥前ヵ	陶器	蓋	3.5	1.6		36		透明釉	明赤褐	砂少	ロクロケズリ	つまみ径0.5cm
14	110	39AQ22	外堀跡	3層	肥前	陶器	瓶		(25.6)	9.6		36	灰釉(浅黄)、鉄絵	にぶい橙	砂少	削り出し高台	
14	111	39AQ21	外堀跡	3層	肥前	陶器	甕		(10.4)	9.8		27	鉄釉(暗赤褐～黒褐)・白泥	にぶい赤	砂並	削り出し高台、ケズリ	高台内外砂付着、高台凹部あり
14	112	39AR18	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗	11.2	6.1	4.8	3	18	透明釉、染付・鉄絵	灰白	黒粒並	削り出し高台	圏線(外)3条(内)3条
15	113	39AR25	外堀跡	3層	肥前	磁器	碗		(5.1)	6.4		15	透明釉、染付	白	黒粒並	削り出し高台	圏線(外)2条(内)1条
15	114	39AQ22	外堀跡	3層	不明	陶器	碗	10.8	5.9	5.6	19	35	透明釉、染付・鉄絵	灰白		削り出し高台	見込み：圏線1重
15	115	39AR18	外堀跡	3層	肥前	磁器	皿		(2.0)	9.3		24	透明釉、染付	白	黒粒少	蛇ノ目凹形高台	圏線(外)3条(内)2条
15	116	39AR19	外堀跡	3層	肥前	磁器	蓋物	15.8	7.6	9.0	3	30	透明釉、染付	白	黒粒多	削り出し高台	圏線(外)2条
15	117	39AR19	外堀跡	3層	肥前	磁器	蓋物	10.6	(7.6)		2		透明釉、染付	白	黒粒少		口縁部釉剥ぎ 圏線(外)1条
15	118	39AR18	外堀跡	3層	肥前	磁器	猪口	8.2	6.5	6.2	9	8	透明釉、染付	白	黒粒並	削り出し高台	漆継ぎ
15	119	39AQ21 39AQ16	外堀跡	覆土下半	肥前	陶器	鉢	28.7	8.7	11.2	14	36	鉄釉(暗赤褐～赤黒)・緑釉・白泥	明赤褐	砂並、礫少	削り出し高台	外面口縁部濃い鉄釉 見込み：目跡5ヵ所
15	120	39AQ22	外堀跡	覆土下半	肥前	陶器	擂鉢		(6.3)	10.0		36	－	にぶい褐	砂多		櫛目1単位7条 底部回転糸切り
15	121	39AQ21	外堀跡	覆土下半	肥前	磁器	皿	13.2	3.0	5.4	6	24	透明釉、染付	白	黒粒多	削り出し高台	

(2) 土製品

図版No.	遺物No.	出土位置	遺構	層位	産地	種別	器種	法量（cm） ※最大値			施釉等	胎土色	文様・調整等（外/内）	備考	胎土含有物
								長さ・口径	厚さ・器高	幅・底径					
15	122	37AS9	SK02	覆土上半	不明	磁器	水滴ヵ	4.3	2.5	6.8	透明釉、色絵(赤・緑・黒)	白	型押し・ナデ		黒粒多
15	123	37AS10	SK02	覆土下半	不明	土製品	芥子面	3.1	(0.9)	2.7	-	浅黄橙	外型	表面剥離	砂少

(3) 漆器・木製品

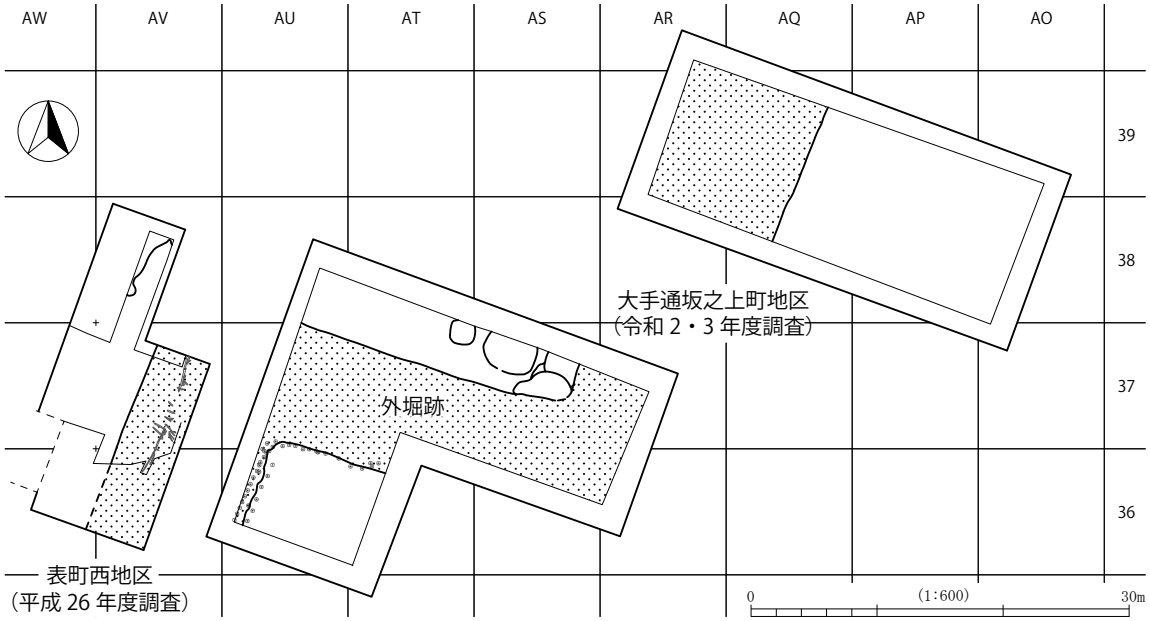
図版No.	遺物No.	出土位置	遺構	層位	種別	器種	法量（cm） ※最大値			文様・調整等（外/内）	木取り	備考
							長さ・口径	厚さ・器高	幅・底径			
16	124	37AS10	SK02	覆土上半	漆器	椀	9.5	3.2	4.6	「丸に三つ引き」	縦木取り	漆　内/外:赤/黒　紋:金ヵ
16	125	37AS9	SK02	覆土上半	漆器	蓋	12.2	(1.5)		丸紋あり	縦木取り	漆　内/外:赤/黒　紋:金ヵ
16	126	37AS9	SK02	覆土下半	漆器	蓋		2.3		草花文 「丸に木瓜」	縦木取り	つまみ径5.3cm 漆　内/外:赤/黒　文様:銀ヵ
16	127	37AS9	SK02	覆土下半	漆器	蓋	10.0	2.7		草花文	横木取り	つまみ径5.3cm 漆　内/外:赤/黒　文様:金ヵ
16	128	37AS10	SK02	覆土下半	漆器	盆	35.0	(3.8)	28.2		板目	漆　口:赤　内/外:黒/黒
16	129	37AS10	外堀跡	3層	漆器	椀		(3.1)			縦木取り	つまみ径5.3cm 漆　内/外:赤/赤　底:黒　底面:赤色漆による線書あり
16	130	37AU20	外堀跡	5層	漆器	椀				「丸に片喰」	縦木取り	漆　内/外:赤/黒　紋:赤
16	131	37AS9	SK02	覆土上半	木製品	箸	16.2	0.9	0.6		辺材	片端部折損
16	132	37AS9	SK02	覆土上半	木製品	箸	23.5	0.6	0.5		辺材	両端部残存
16	133	37AS9	SK02	覆土上半	木製品	加工材	22.2	1.0	1.1		辺材	両端部残存
16	134	37AS10	SK02	覆土上半	木製品	燭台	(14.3)	4.4	4.4		辺材	端部折損
16	135	37AS9	SK02	2層	木製品	下駄	23.2	11.2	7.5	差歯（露卯）	板目	黒色漆
16	136	37AS9 ・10	SK02	覆土下半	木製品	下駄	22.8	7.8	7.9	差歯（陰卯）	板目	
16	137	37AS10	SK02	覆土上半	木製品	下駄	(19.9)	3.0	9.0	連歯	板目	
16	138	37AS9	SK02	覆土上半	木製品	下駄	22.9	2.7	7.1	刳り（無眼）	板目	
17	139	37AS9	SK02	覆土上半	木製品	下駄	21.7	2.1	7.4	無歯	板目	踵部欠損
17	140	37AU19	外堀跡	3層	木製品	下駄	19.5	3.1	8.4	差歯（陰卯）	板目	歯部欠損
17	141	38AT18	-	撹乱	木製品	下駄	20.4	2.9	9.3	刳り	板目	黒色漆
17	142	39AQ22	外堀跡	覆土下半	木製品	下駄	22.4	1.7	9.7	無歯	板目	踵部：格子目状の刻み
17	143	37AS10	外堀跡	3層下半	木製品	下駄	25.0	4.6	9.8	連歯	板目	踵部欠損
17	144	36AU2	外堀跡		木製品	杭	148.5	8.0	7.0		芯持丸木	上端折損　取り上げNo.1
17	145	36AU4	外堀跡		木製品	杭	151.0	7.9	8.1		芯持丸木	上端折損、先端部炭化物付着　取り上げNo.2
17	146	36AU4	外堀跡		木製品	杭	137.0	6.8	7.3		芯持丸木	上端折損、先端部割れ　取り上げNo.3
17	147	36AU6	外堀跡		木製品	杭	147.0	10.2	8.1		芯持丸木	上端折損　取り上げNo.5
17	148	36AU2	外堀跡		木製品	杭	119.0	9.4	9.5		芯持丸木	上端折損、下端腐食　取り上げNo.7
17	149	36AU12	外堀跡		木製品	杭	82.2	8.7	7.5		芯持丸木	上端折損　取り上げNo.4
17	150	36AU7	外堀跡		木製品	杭	79.9	6.8	7.5		芯持丸木	上端折損　取り上げNo.6

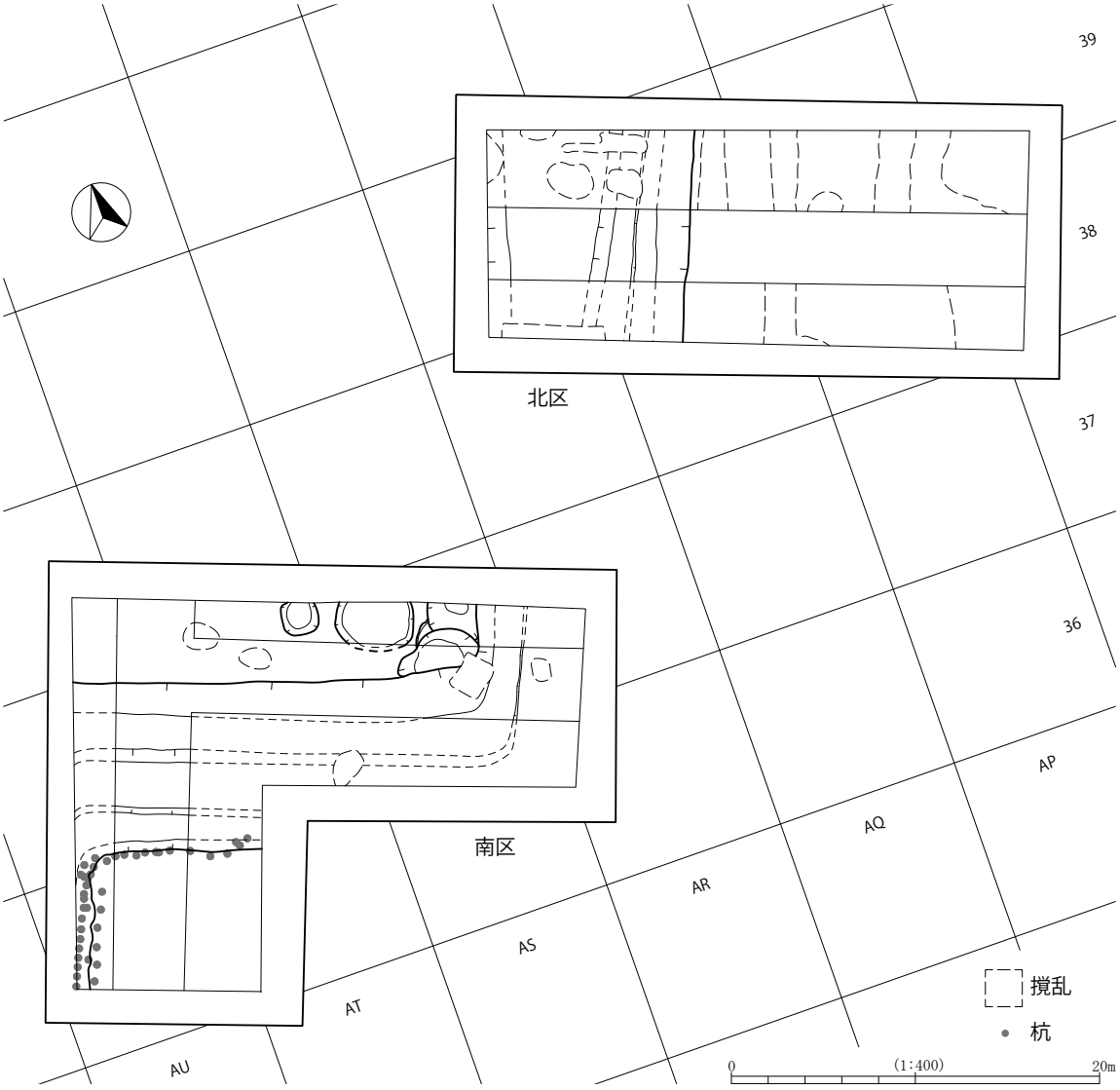
(4) 金属製品

図版No.	遺物No.	出土位置	遺構	層位	種別	器種	法量（cm） ※最大値			文様・調整等（外/内）	備考
							長さ・口径	厚さ・器高	幅・底径		
18	151	37AS14	外堀跡	4層	金属製品	鎌	10.2	0.2	7.3	刃部折損	重さ24.1g
18	152	37AS9	SK02	覆土上半	金属製品	釘	(3.9)	0.5	0.9	断面方形	重さ6.0g
18	153	37AS9	SK02	覆土上半	金属製品	煙管	6.8	1.0	1.0	火皿欠損	重さ5.3g
18	154	37AT15	外堀跡	3層	金属製品	鍬	41.5	1.0	14.8	基部折れあり	重さ1110.8g
18	155	37AS9	SK02	覆土下半	金属製品	銭貨	2.2	0.1		新寛永	外縁内径1.9cm、内郭外径0.8cm、内郭内径0.69cm、文字厚0.15cm、重さ2.8g
18	156	37AS7	SK01	覆土	金属製品	銭貨	2.3	0.1		新寛永	外縁内径2.0cm、内郭外径0.8cm、内郭内径0.65cm、文字厚0.11cm、重さ1.6g

(5) 石製品

図版No.	遺物No.	出土位置	遺構	層位	種別	器種	法量（cm） ※最大値			文様・調整等（外/内）	備考
							長さ・口径	厚さ・器高	幅・底径		
18	157	37AS9	SK02	覆土上半	石製品	碁石	2.1	4.9	2.1	頁岩	
18	158	37AS10	外堀跡 SK02	3層 覆土上半	石製品	硯	13.2	1.6	6.0	粘板岩、表面擦痕、墨付着	
18	159	37AS10	SK02	覆土上半	石製品	礎石ヵ	19.2	9.2	15.8	角閃石安山岩	
18	160	37AS15	外堀跡	3層	石製品	樋	(22.1)	(8.3)	(19.5)	緑色凝灰岩	


AW
AV
AU
AT
AS
AR
AQ
AP
AO
39
38
37
36
大手通坂之上町地区
（令和 2・3 年度調査）
外堀跡
表町西地区
（平成 26 年度調査）
0
(1:600)
30m

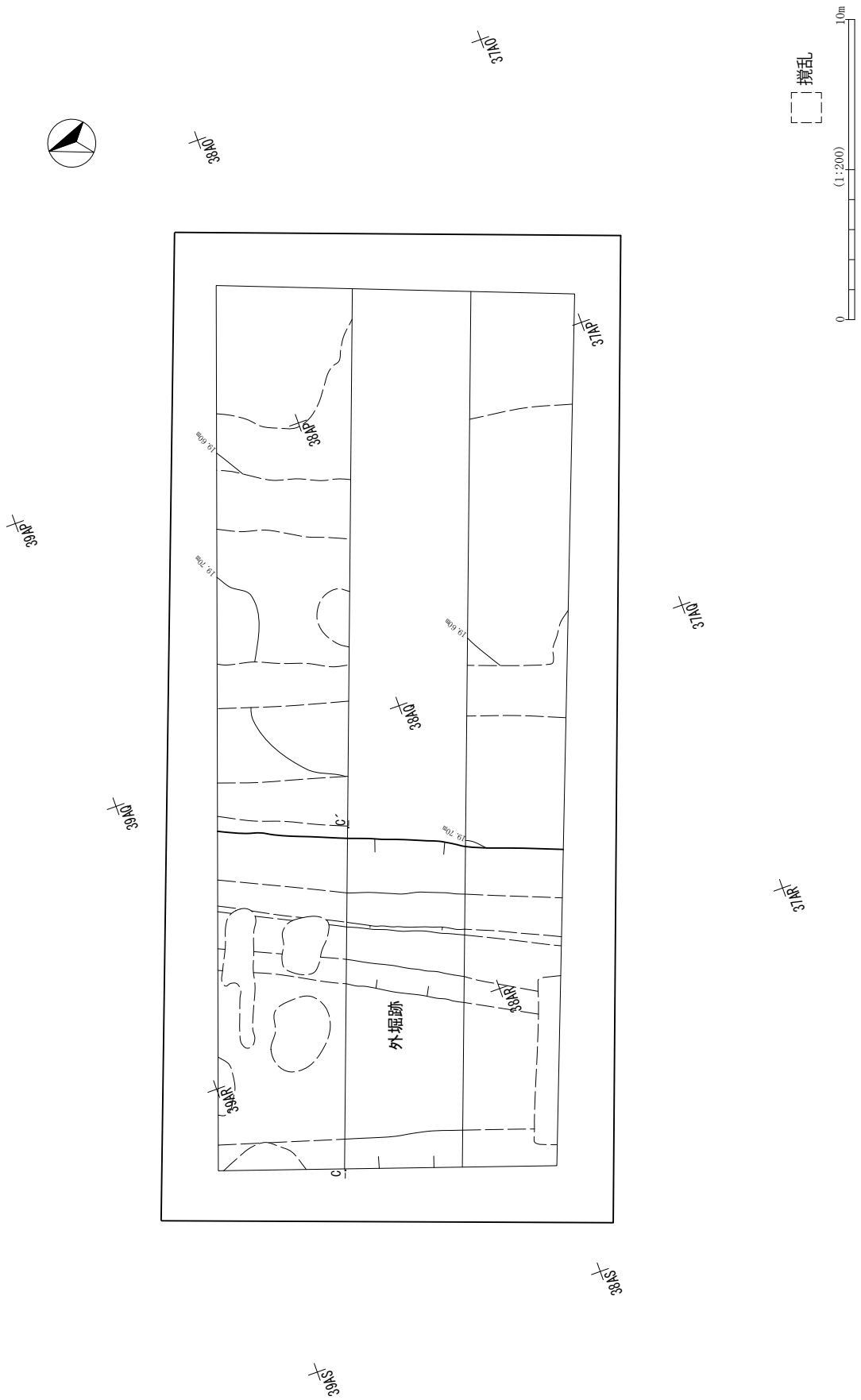

39
38
37
36
AP
AQ
AR
AS
AT
AU
北区
南区
攪乱
杭
0
(1:400)
20m

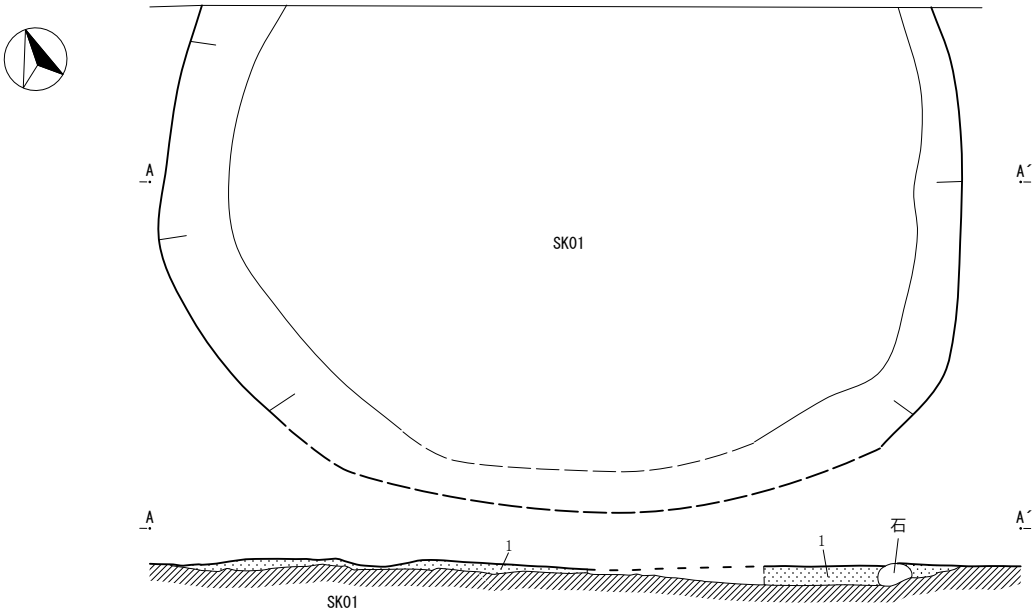
遺構全体図（1）南区

撹乱
杭
0
(1:200)
10m
SK01
SK02
SK03
SK04
外堀跡
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
19.80m
19.90m
20.00m

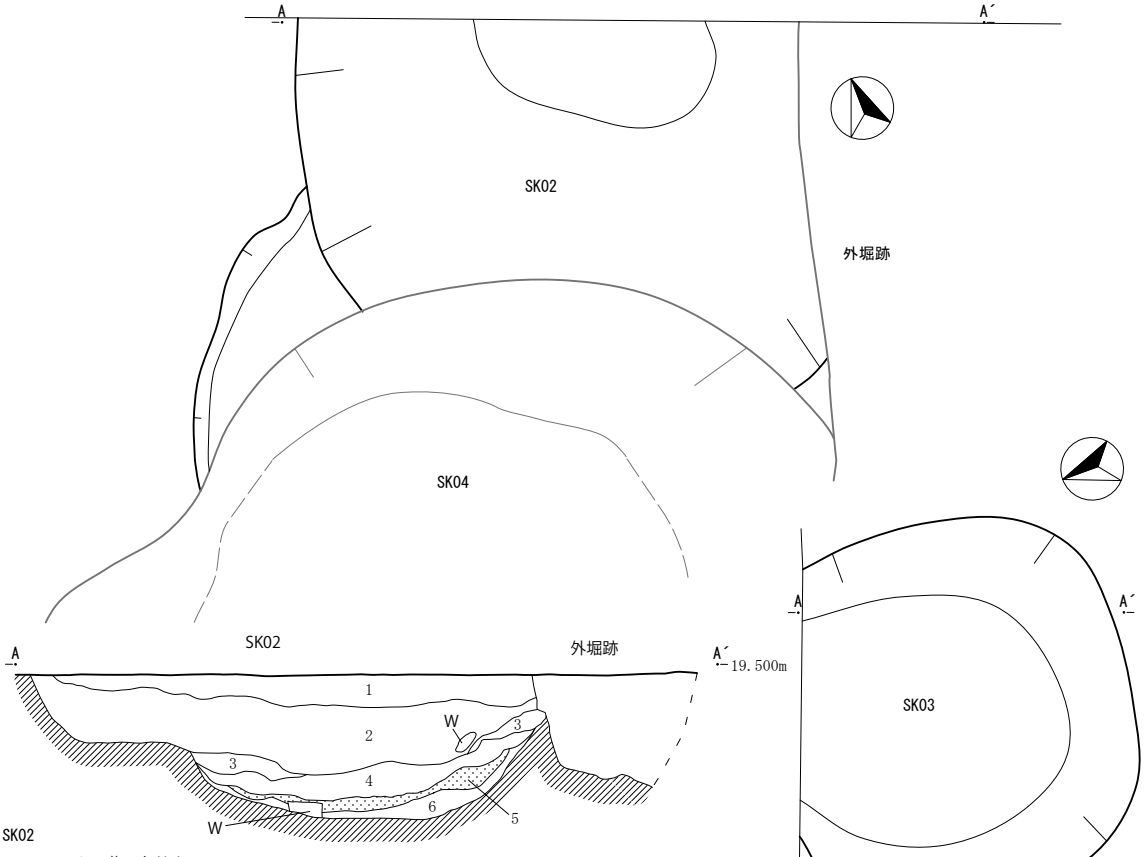
遺構全体図（２）北区

図版３

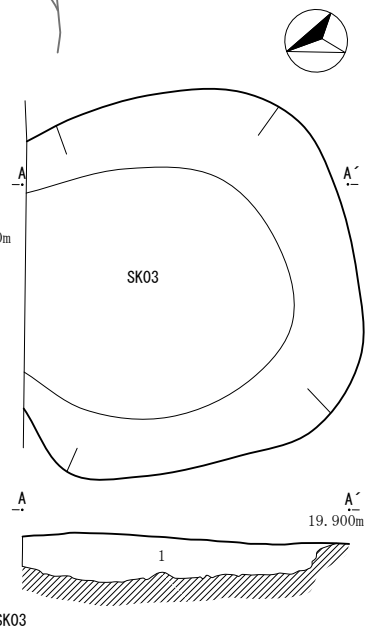




１．2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト
（粘性やや強、しまり弱、焼土粒・炭化物を多量に含む。径 10 ～ 15cm 礫を含む）

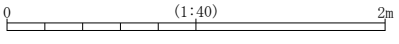


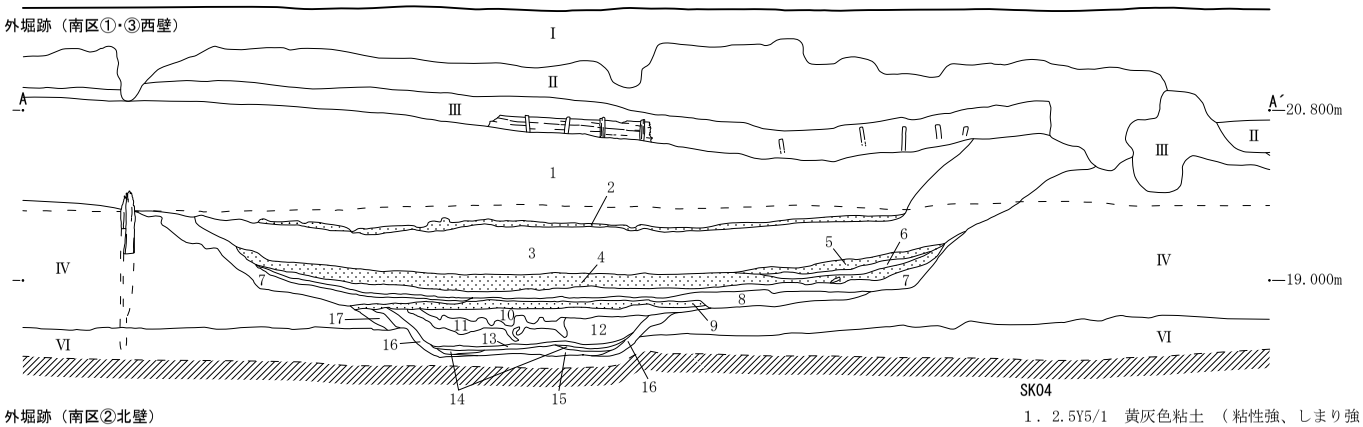
１．2.5Y5/1　黄灰色粘土
（粘性強、しまり強、炭化物・径 3cm 礫・炭化材を含む）
２．7.5YR3/2　黒褐色粘土
（粘性やや強、しまり中、炭化物・径 3cm 礫・木材を多量に含む）
３．5GY7/1　明オリーブ灰色シルト　（粘性やや強、しまり強、黒褐色土が混入する）
４．10YR5/1　褐灰色粘質シルト
（粘性やや強、しまりやや弱、炭化物・径 2cm 礫を含む。明オリーブ灰色シルトブロック混入する）
５．10YR2/1　黒色粘土　（粘性強、しまり中、炭化物多量に含む。木材含む）
６．10YR5/1　褐灰色粘質シルト　（粘性強、しまりやや弱、明オリーブ灰色シルトブロック多量に含む。木材・径 3cm 礫を含む）

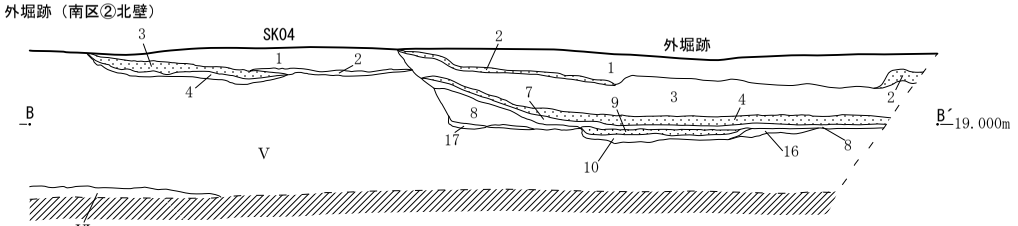


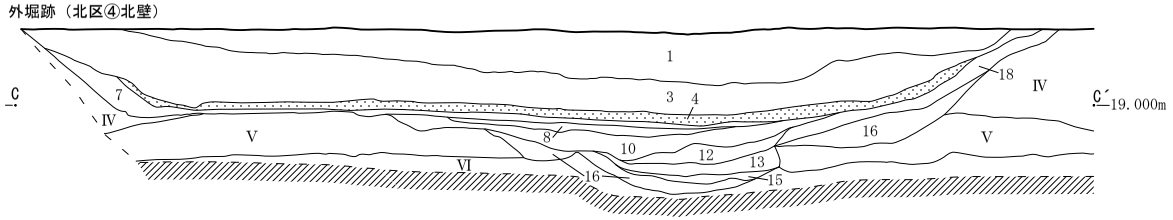
１．7.5YR2/2　黒褐色粘質シルト
（粘性やや強、しまり弱、炭化物・木材を含む）

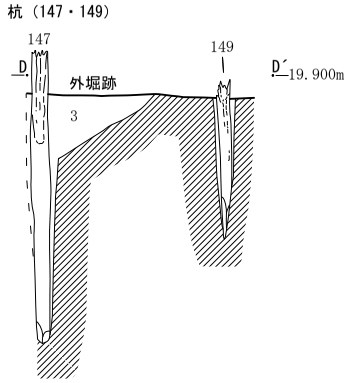
炭化物

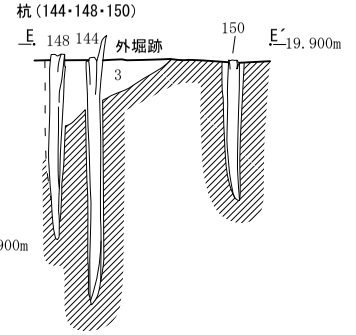


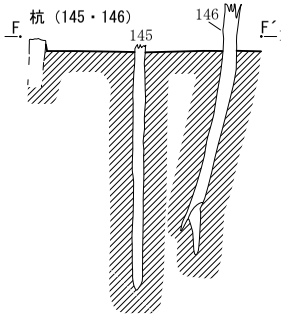


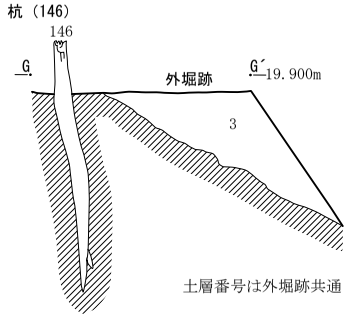


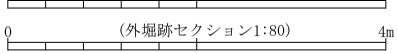












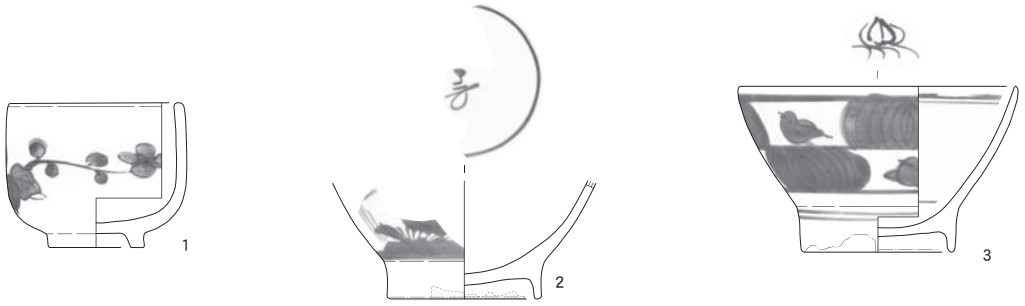
SK04

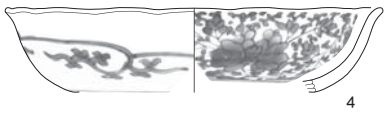
1．2.5Y5/1　黄灰色粘土　（粘性強、しまり強）
2．2.5Y5/1　黄灰色粘土
（粘性強、しまり強、青灰色砂質シルトが混入する）
3．10YR2/1　黒色粘土
（粘性強、しまり中、炭化物・焼土粒を多量に含む）
4．10YR2/1　黒色粘土
（粘性強、しまり中、３層に青灰色砂質シルトが混入する）

外堀跡

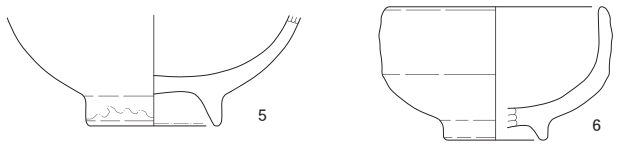
1．5BG7/1～5GY7/1　明青灰～明オリーブ灰色粘土　（粘性強、しまり弱）
2．N2/0　黒色粘土　（粘性強、しまり弱、炭化物を多量に含む）
3．10YR3/1　黒褐色粘土　（粘性強、しまり中、炭化物・木材を含む。径10cm礫を多量に含む）
4．N2/0　黒色粘土　（粘性強、しまり中、灰白色粘土がラミナ状に堆積する。炭化物・木片を含む）
5．N2/0　黒色粘土　（粘性強、しまり中）
6．7.5Y4/1　灰色シルト　（粘性中、しまり中、灰～灰白色シルトブロックが多量に混入する）
7．5Y4/1　灰色粘土　（粘性強、しまり強、径３～10cm礫を含む）
8．5Y4/1　灰色粘土　（粘性中、しまり強、青灰色砂ブロックが多量に混入する）
9．N2/0　黒色粘土　（粘性強、しまり中、炭化物を多量に含む）
10．10YR5/1　褐灰色粘土　（粘性強、しまり強、青灰色砂質シルトブロックが混入する）
11．7.5Y6/2　灰オリーブ色粗砂　（粘性なし、しまり中、褐灰色粘土がマーブル状に混入する）
12．5Y3/1　オリーブ黒色粘土　（粘性強、しまり強、木片を含む）
13．10YR4/1　褐灰色粘土　（粘性強、しまり中、灰オリーブ色シルトブロックが混入する）
14．10YR2/1　黒色粘土　（粘性強、しまり中）
15．10YR4/1　褐灰色粘土　（粘性中、しまり強、明オリーブ灰色シルトブロックが混入する）
16．10YR4/1　褐灰色粘土　（粘性中、しまり中、青灰色砂質シルトが多量に混入する）
17．5GY7/1　明オリーブ灰色砂質シルト
（粘性なし、しまり中、灰オリーブ色粗砂・褐灰色粘土が混入する）
18．10YR6/1　褐灰色粘土　（粘性強、しまり強、黄褐色細砂が混入する）

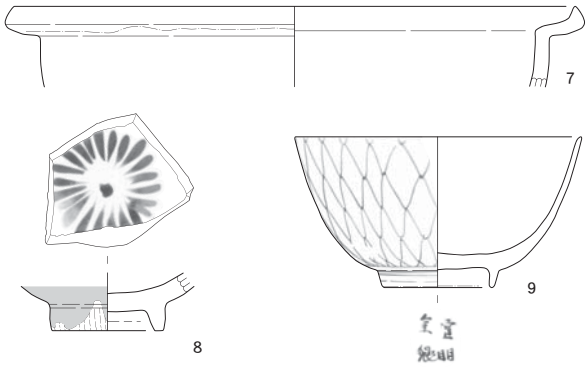
試掘 1 T



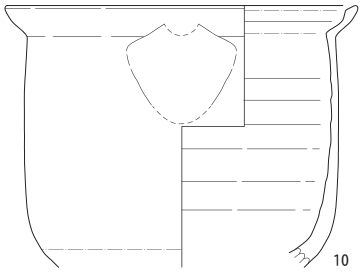


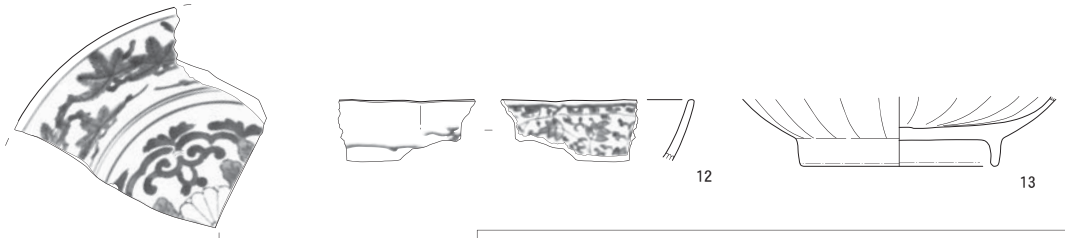
試掘 2 T

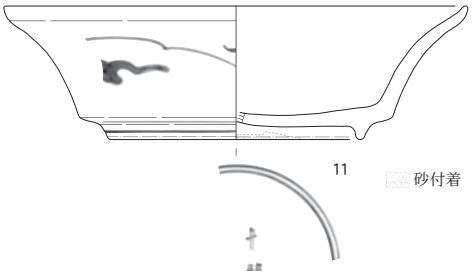




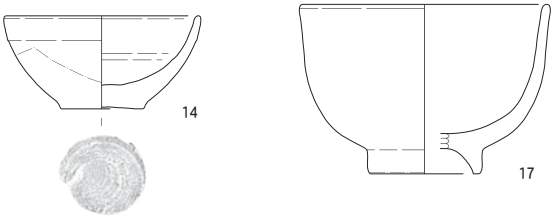
SK01

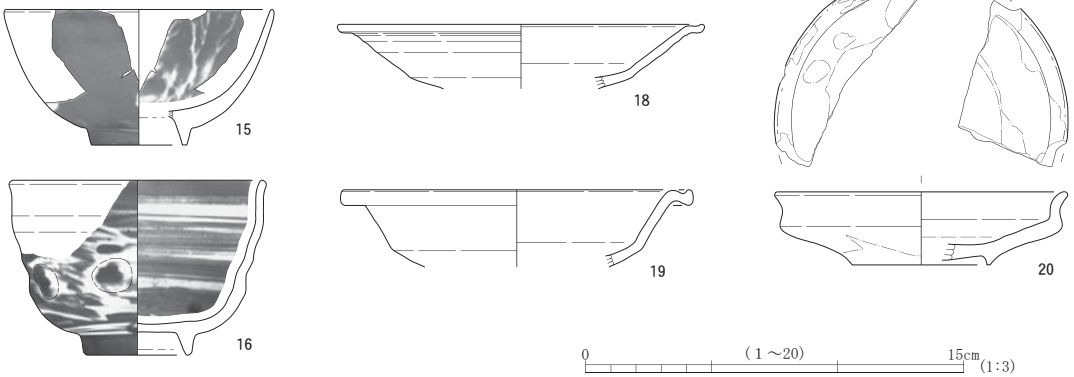


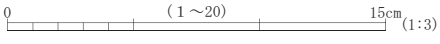


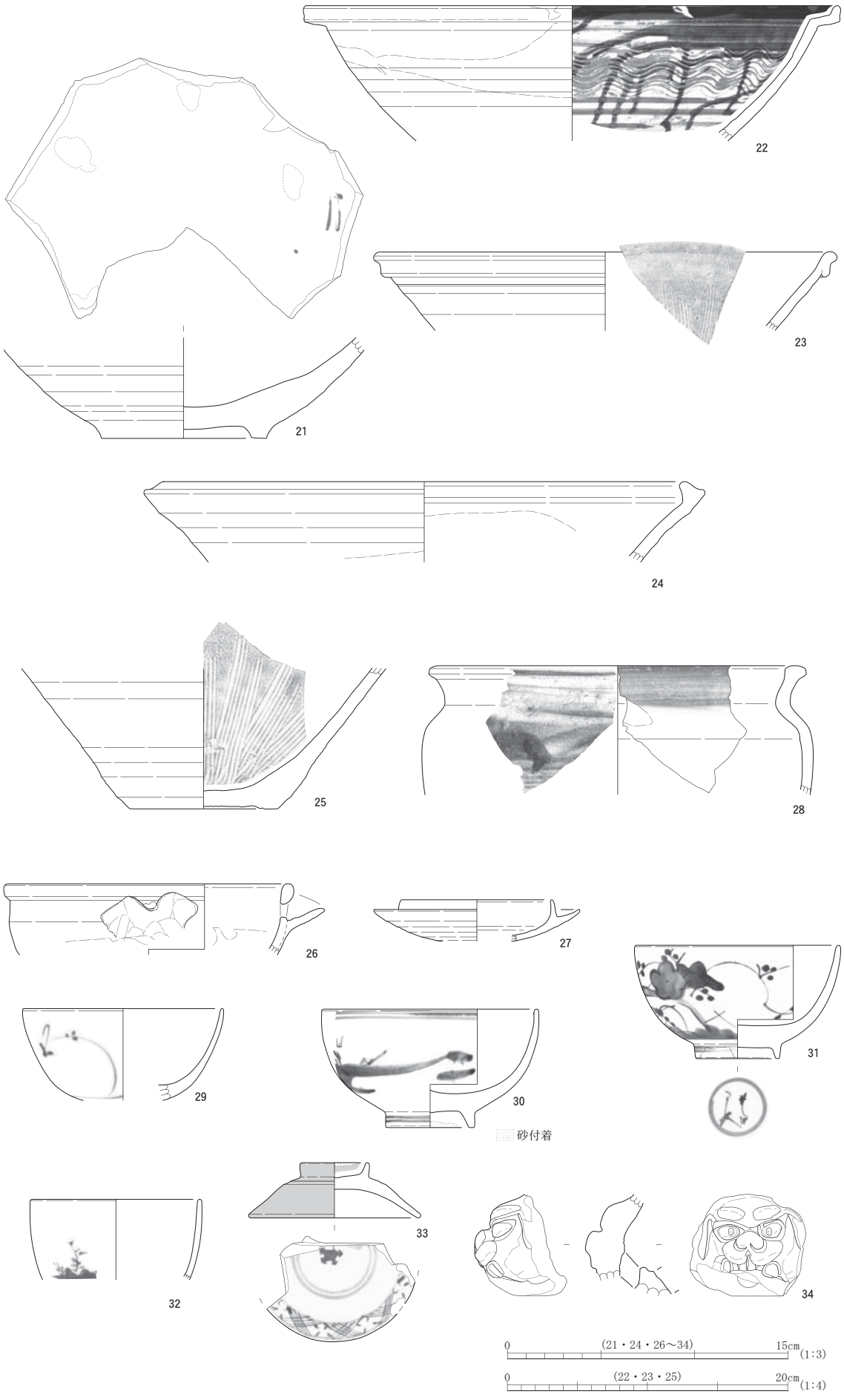


SK02（覆土上半・2層）

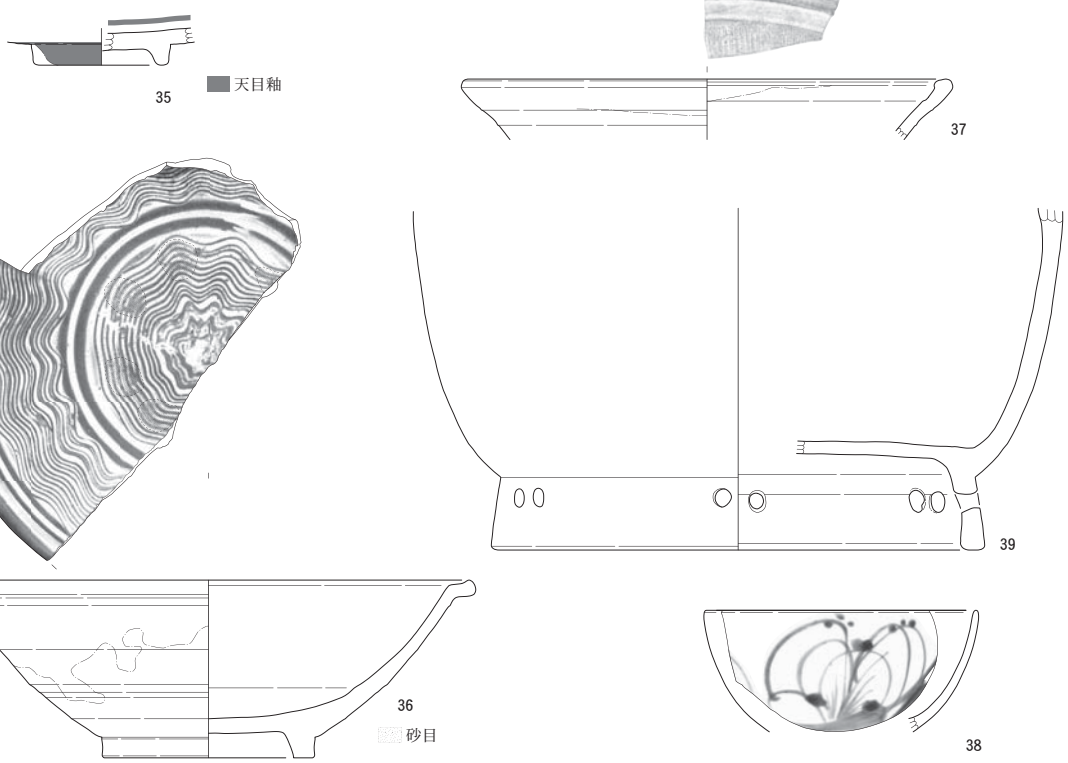




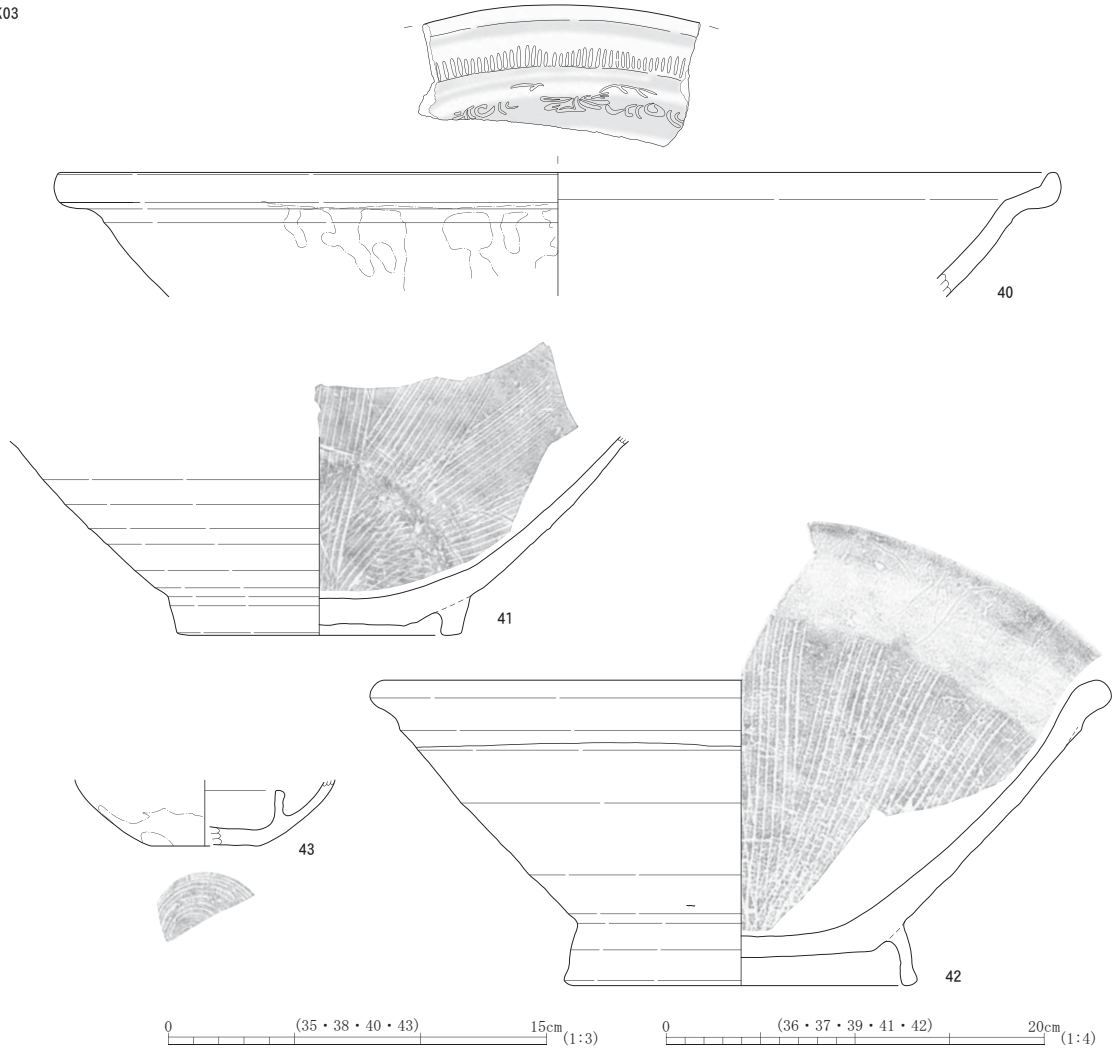



22
23
21
24
25
28
26
27
29
30
31
砂付着
32
33
34
0 (21・24・26～34) 15cm (1:3)
0 (22・23・25) 20cm (1:4)

SK02（覆土下半）

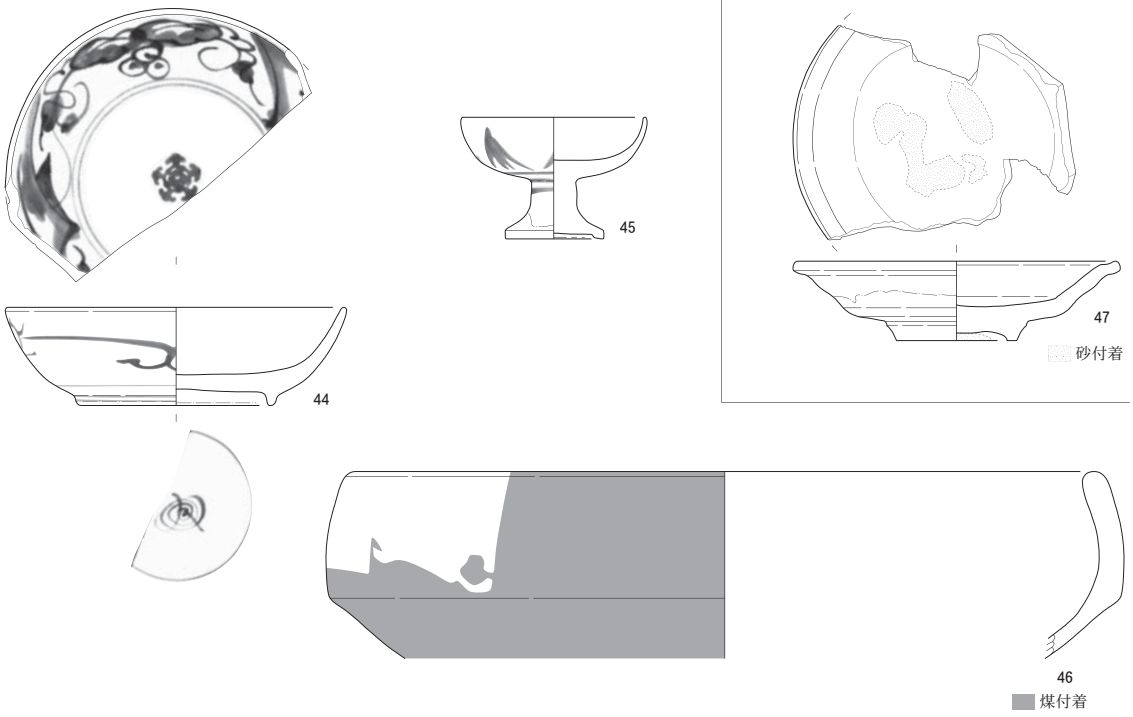


SK03

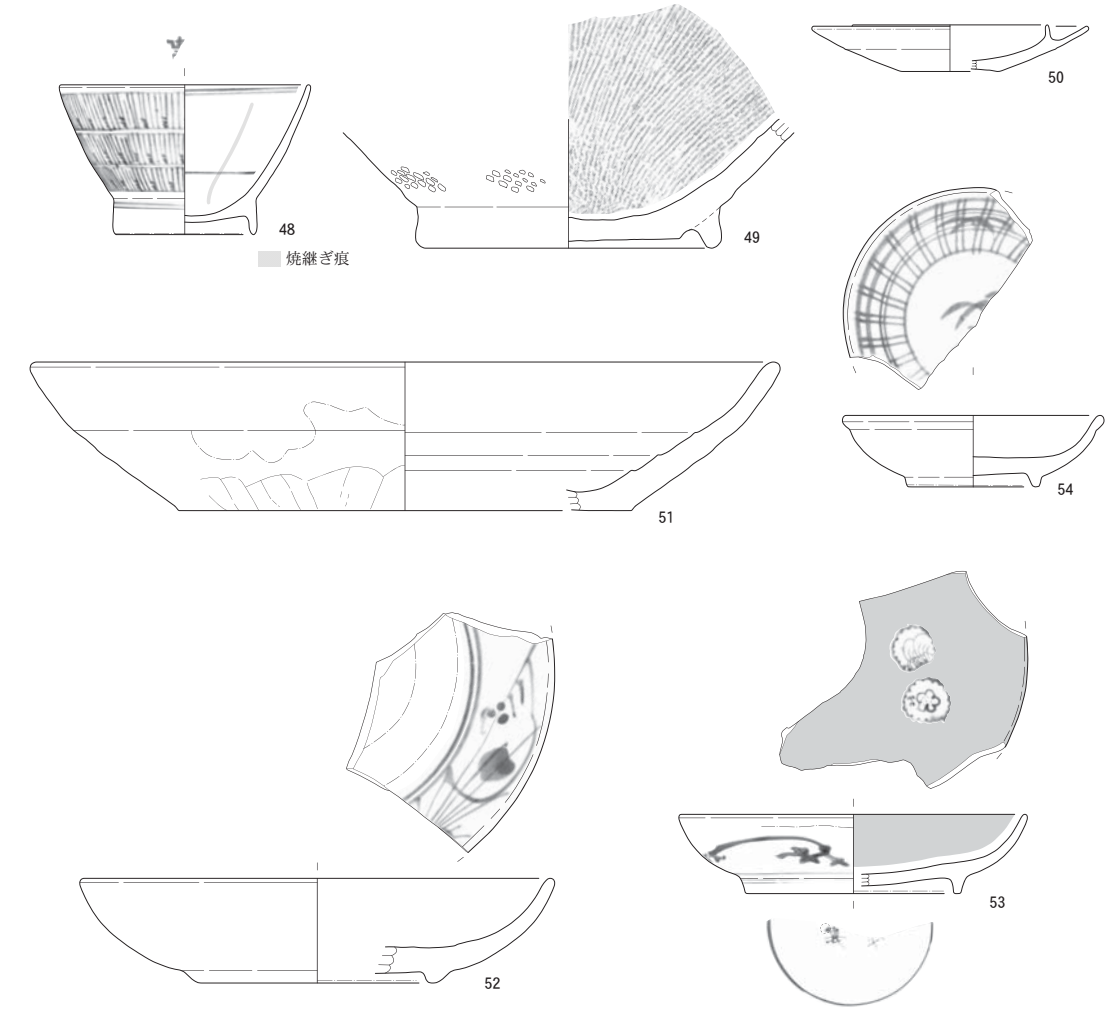


0　(35・38・40・43)　15cm　(1:3)

0　(36・37・39・41・42)　20cm　(1:4)



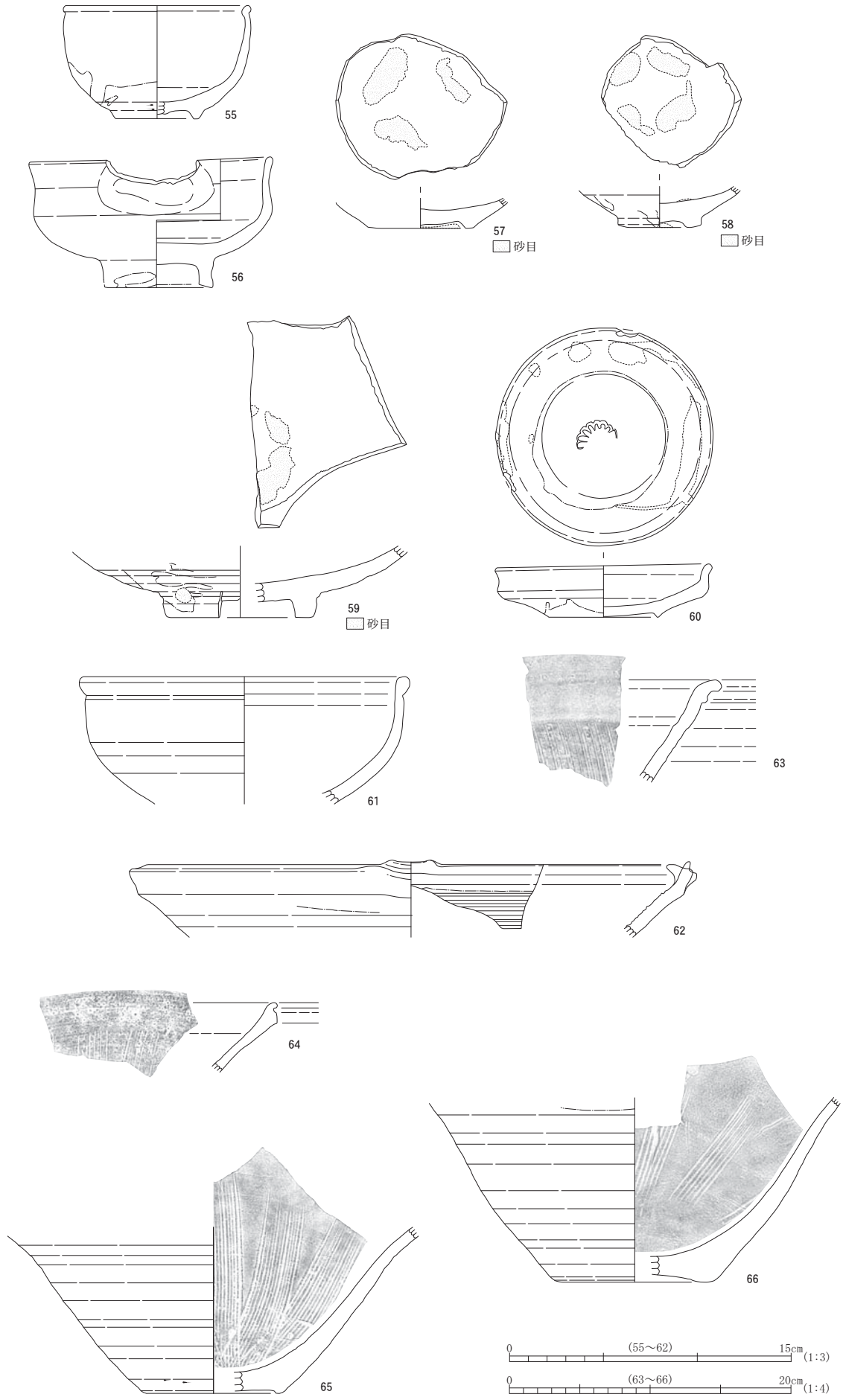
外堀跡（南区　1～3層）

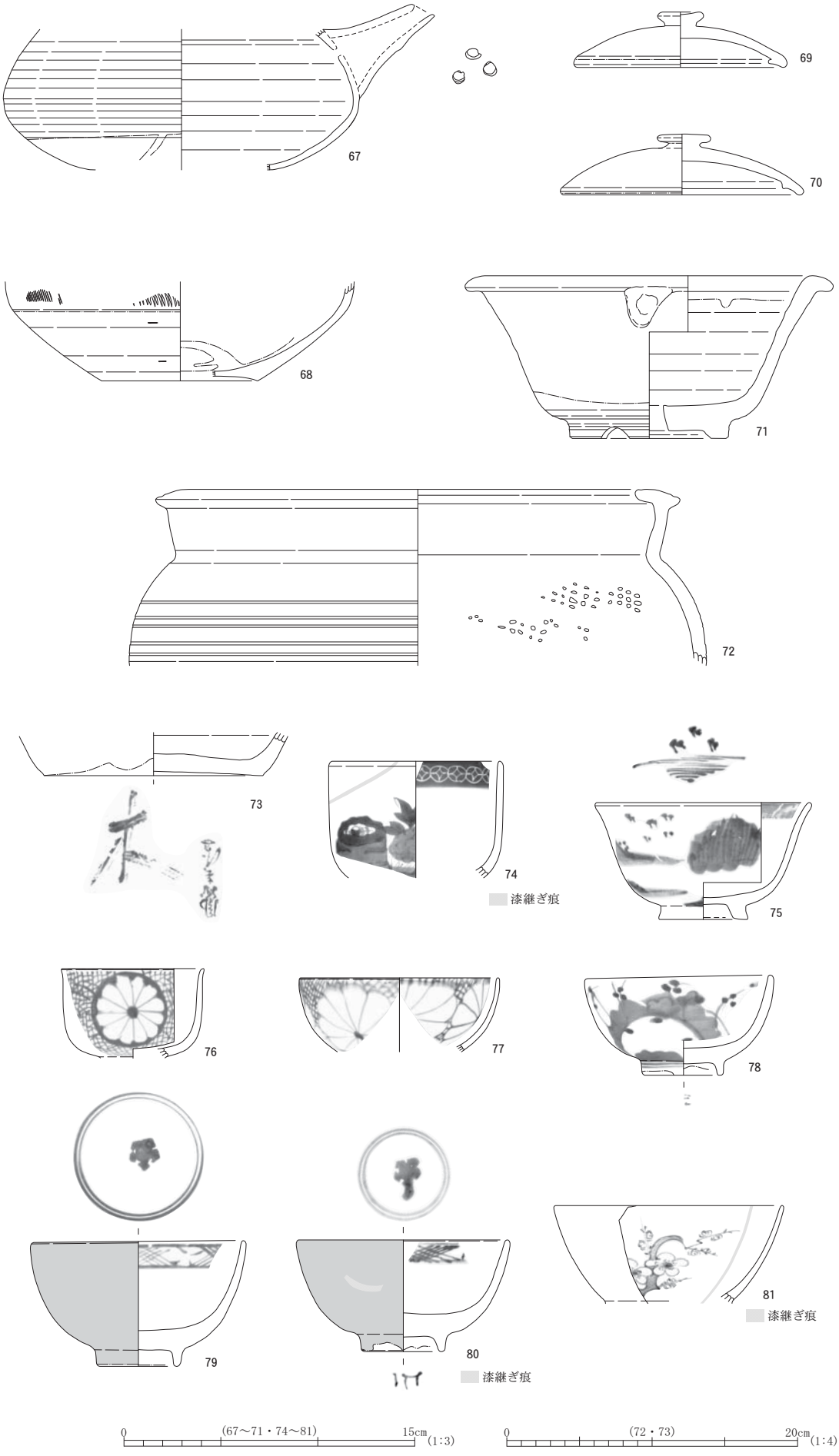


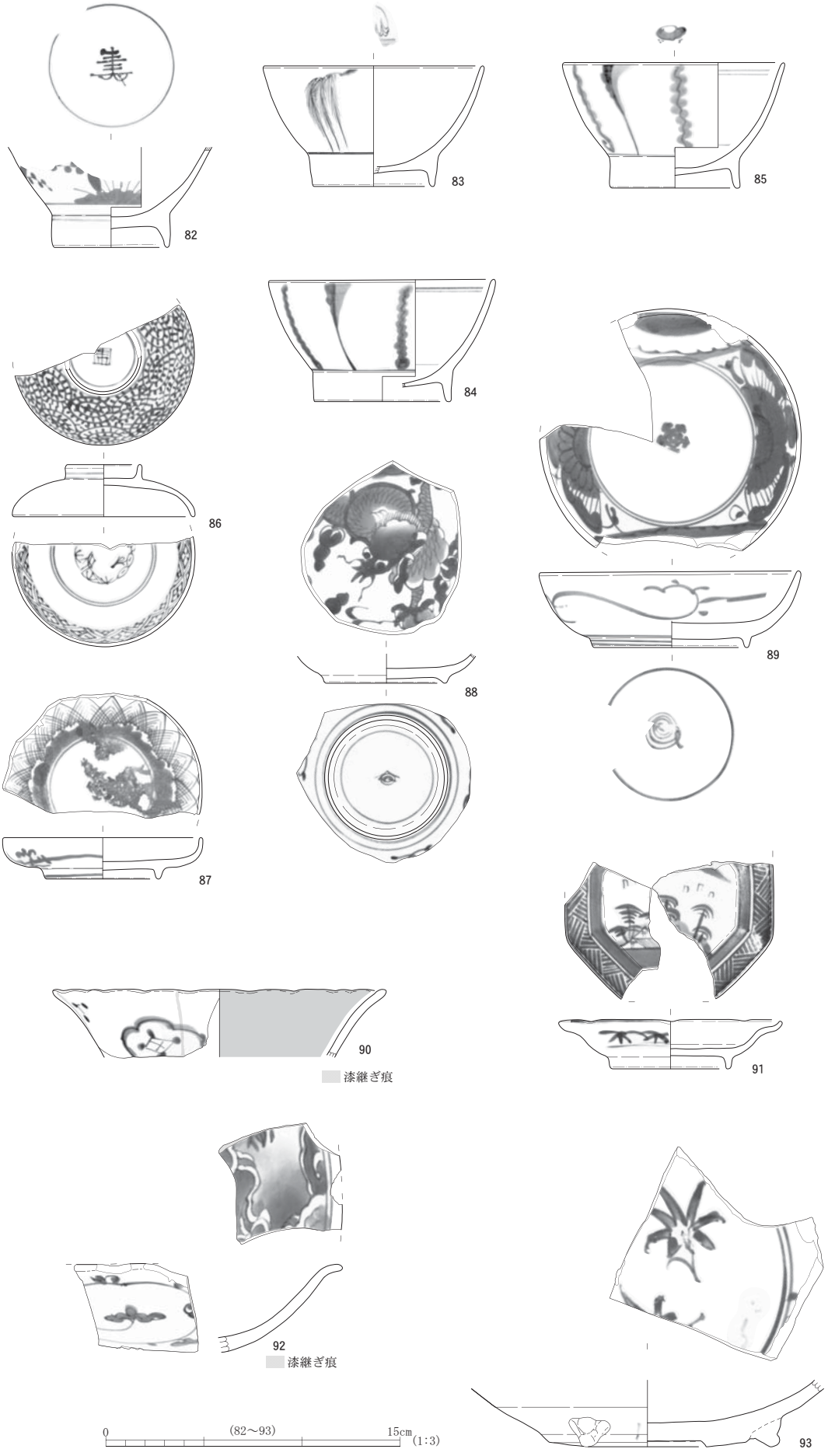
0　(44～48・50～54)　15cm　(1:3)

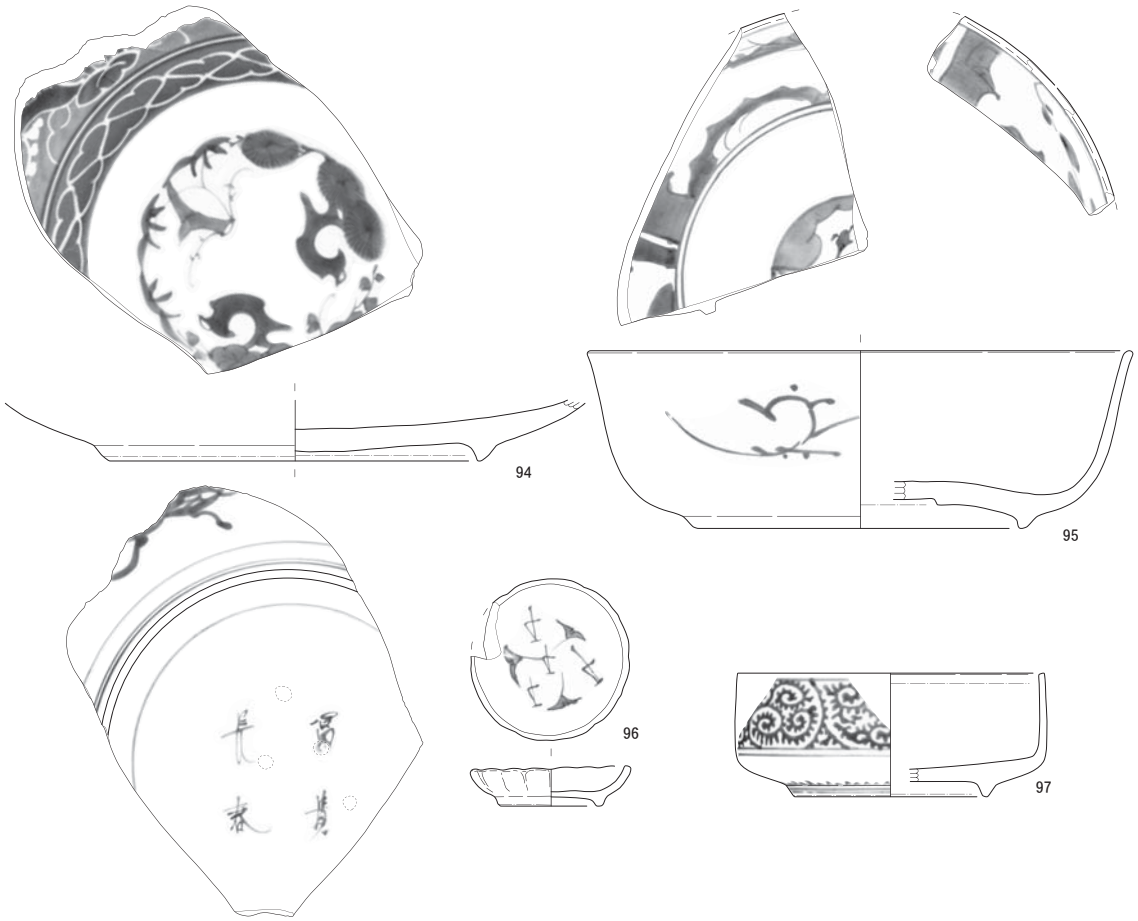
0　(49)　20cm　(1:4)

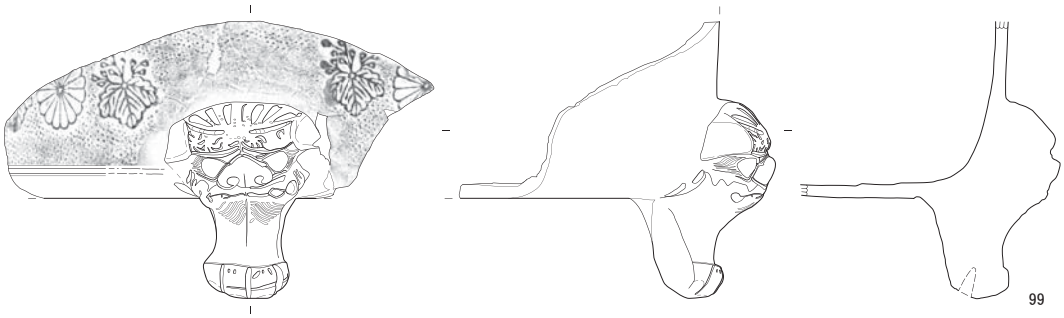
外堀跡（南区　３層）

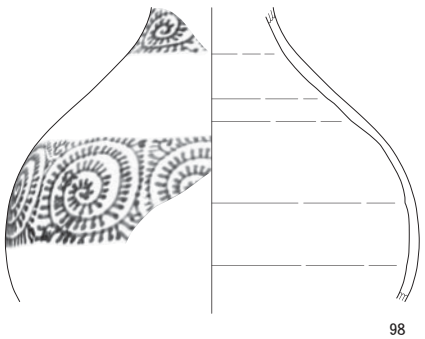

55
56
57
砂目
58
砂目
59
砂目
60
61
63
62
64
66
65
0
(55～62)
15cm
(1:3)
0
(63～66)
20cm
(1:4)


67
69
70
68
71
72
73
74
漆継ぎ痕
75
76
77
78
79
80
漆継ぎ痕
81
漆継ぎ痕
0
(67～71・74～81)
15cm
(1:3)
0
(72・73)
20cm
(1:4)

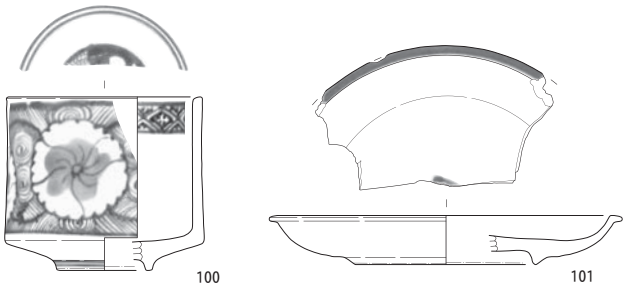

82
83
84
85
86
87
88
89
90
漆継ぎ痕
91
92
漆継ぎ痕
93
0
(82～93)
15cm
(1:3)

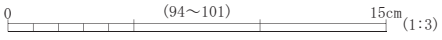




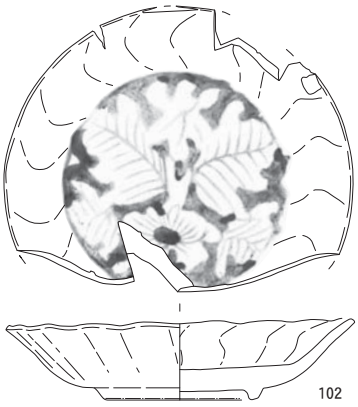


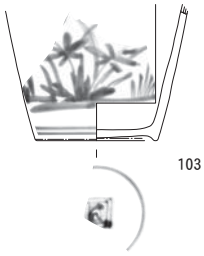
外堀跡（南区　４層）



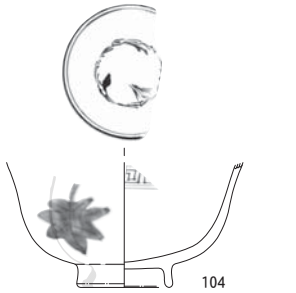


外堀跡（南区　覆土下半・その他）

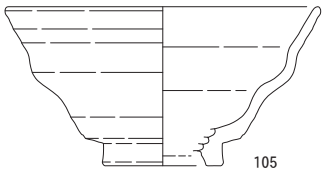


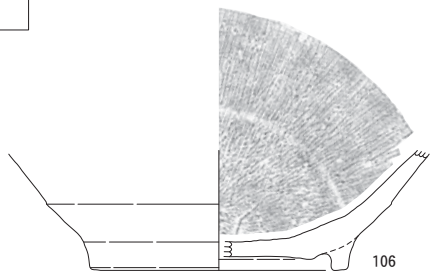


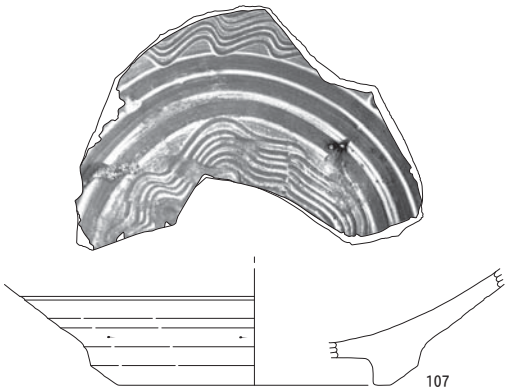
外堀跡（北区　1層）

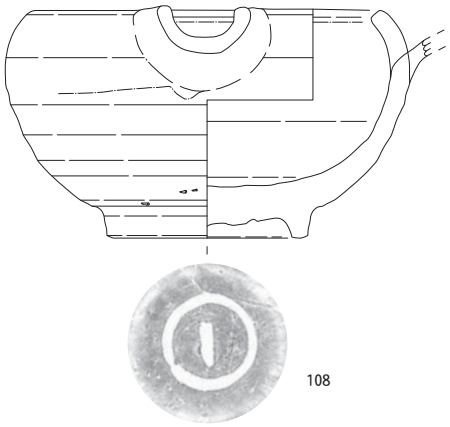


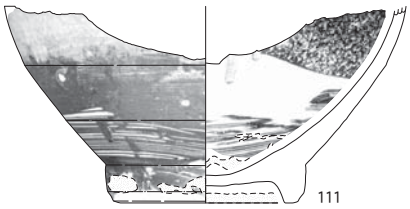
外堀跡（北区　3層）

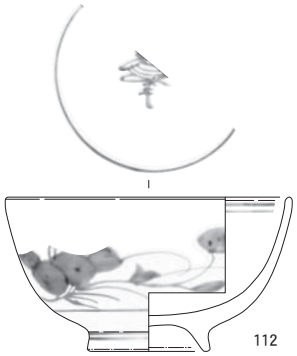


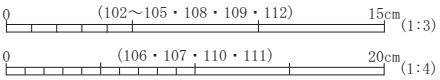


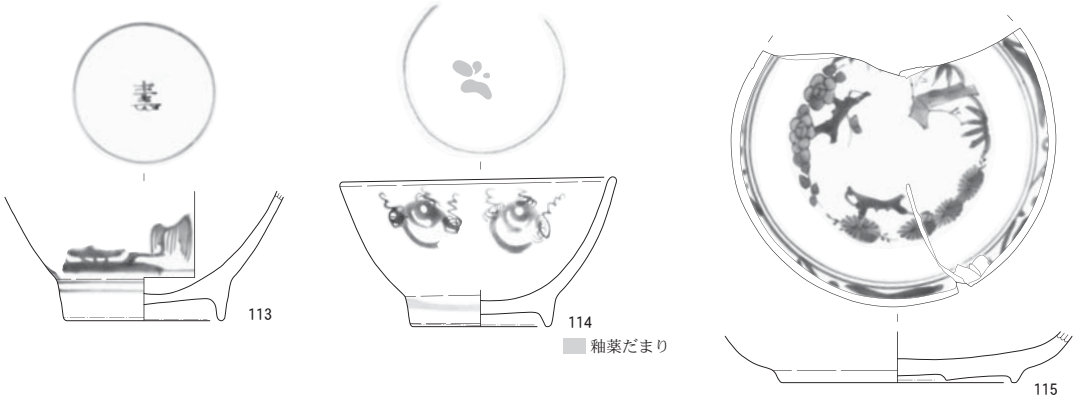


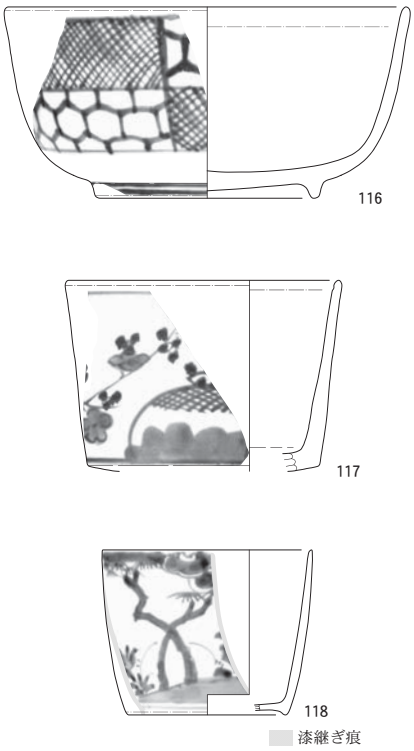




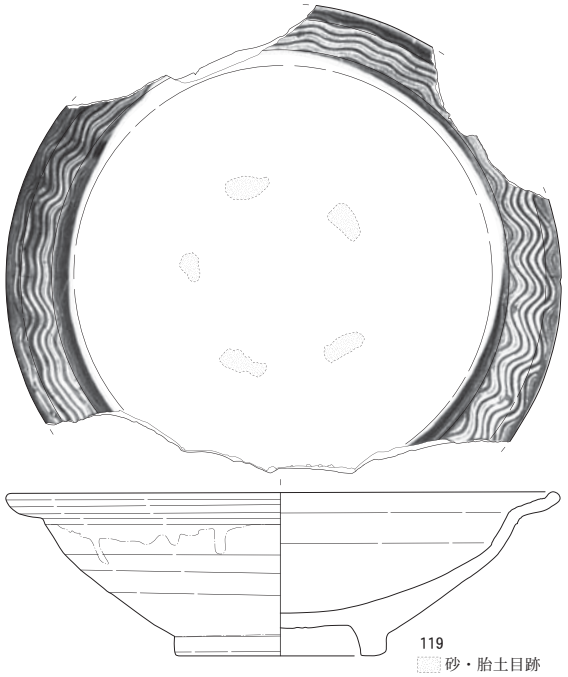


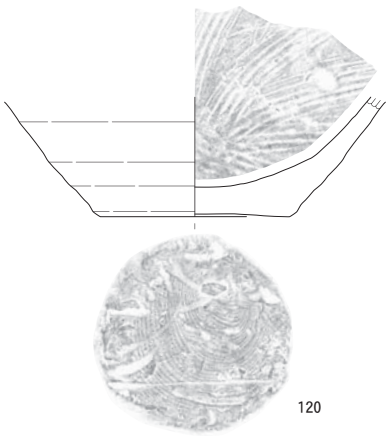


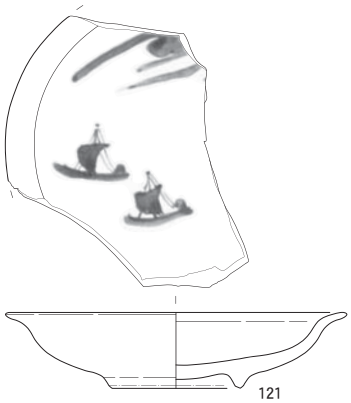




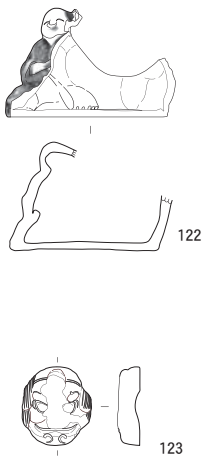
外堀跡（北区　覆土下半）

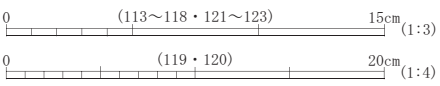




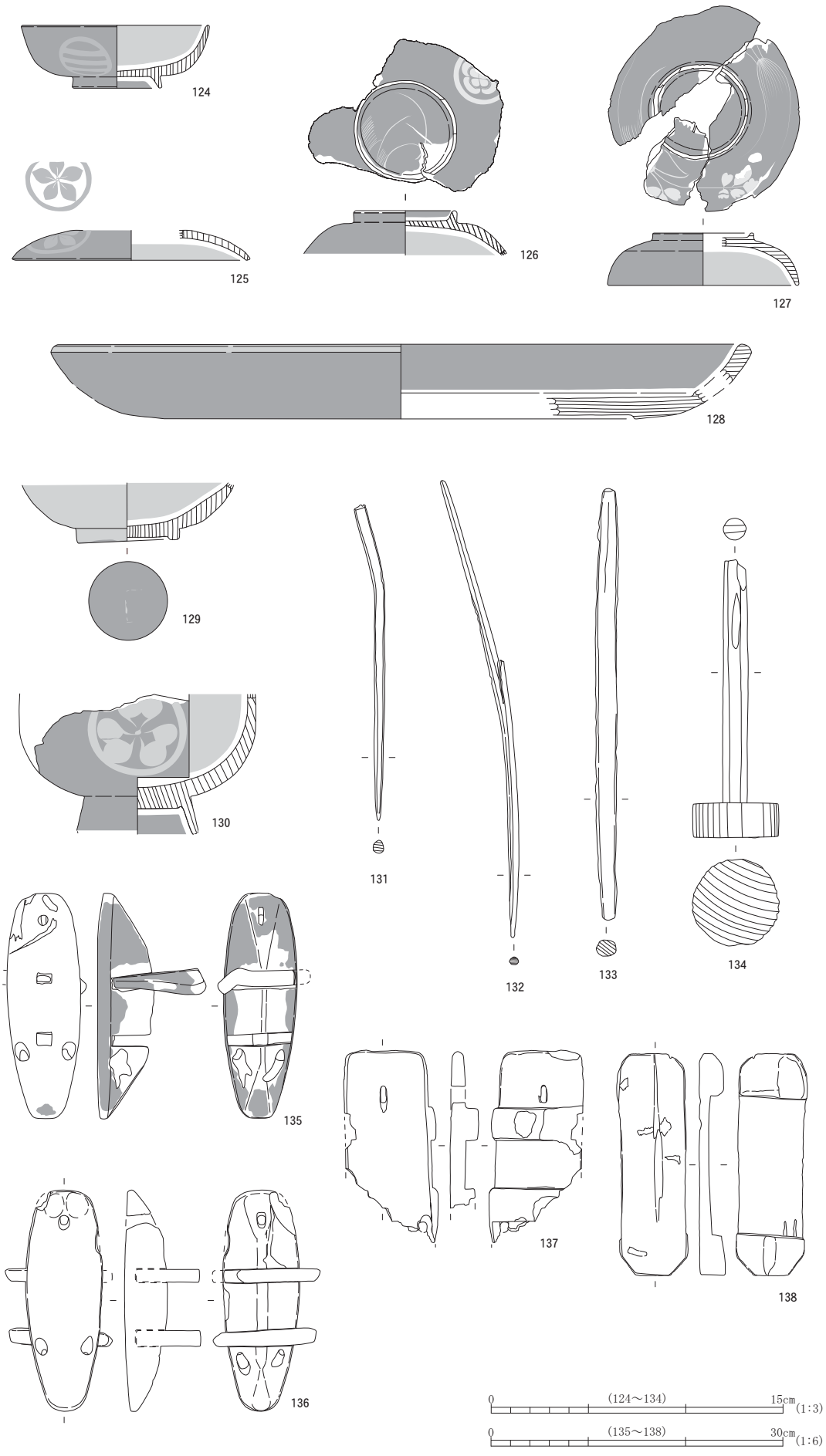


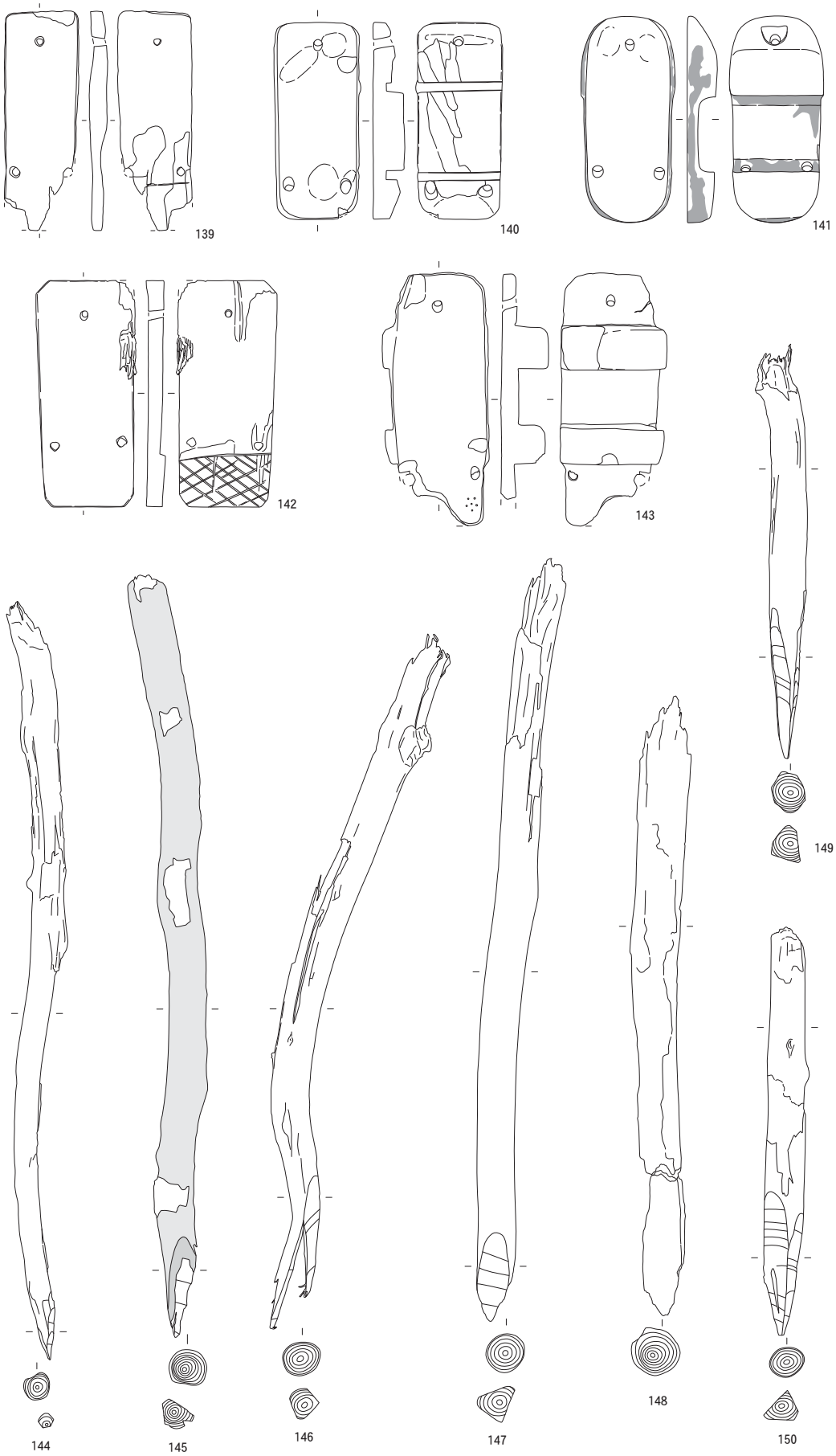
土製品



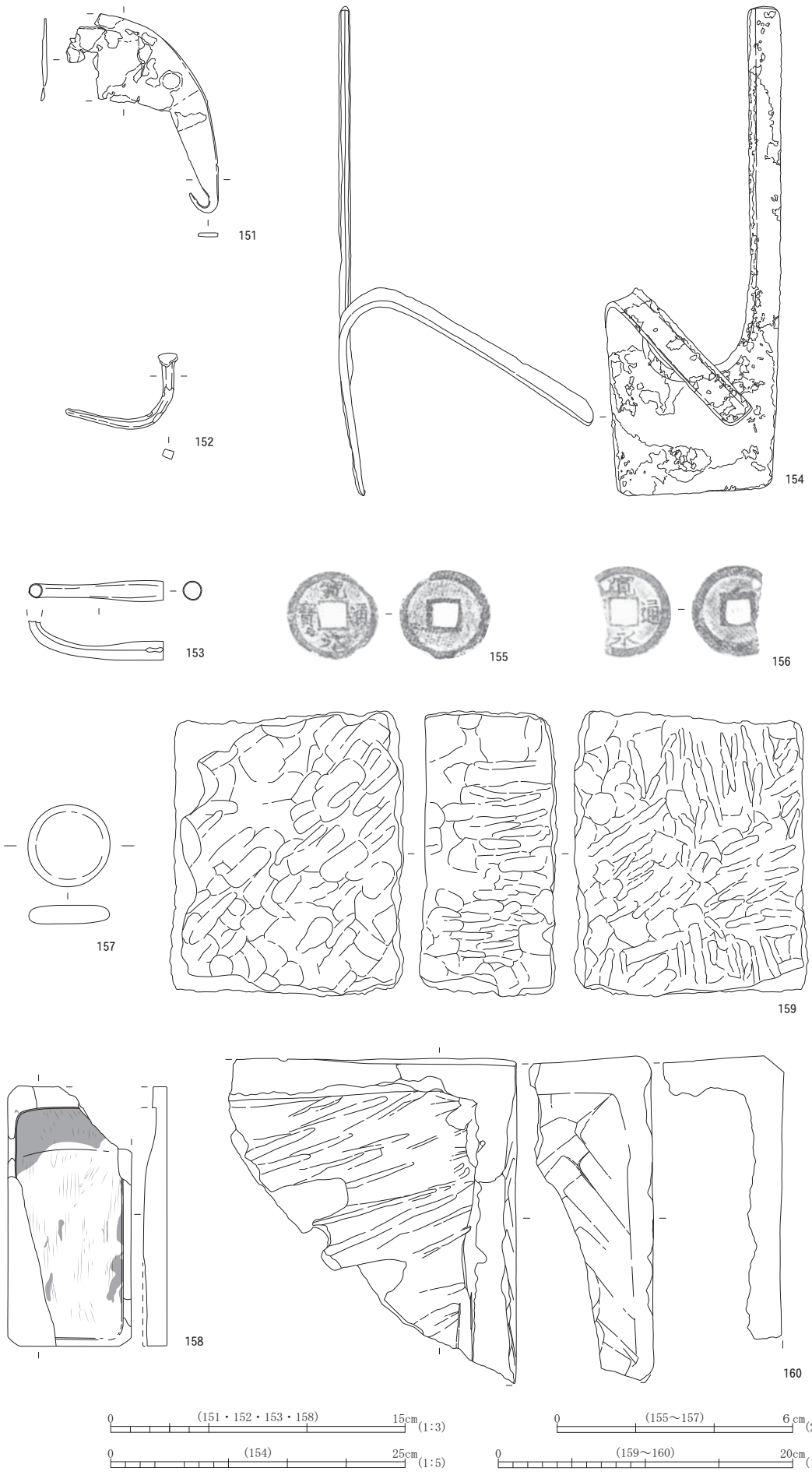


遺物実測図（11）

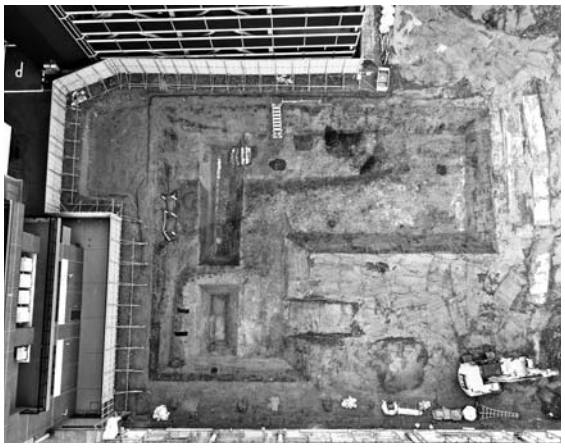

124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
0 (124～134) 15cm (1:3)
0 (135～138) 30cm (1:6)


139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
0　(139～143)　30cm　(1:6)
0　(144～150)　60cm　(1:12)

遺物実測図（13）


151
152
154
153
155
156
157
159
158
160
0 (151・152・153・158) 15cm (1:3)
0 (155～157) 6cm (2:3)
0 (154) 25cm (1:5)
0 (159～160) 20cm (1:4)

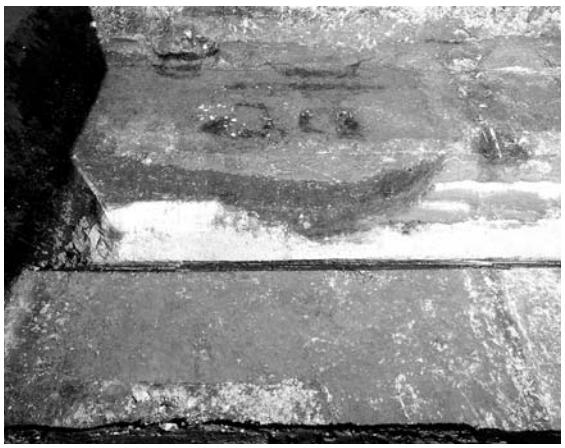
調査区全景（南から）


南区全景（南から）

SK02　遺物出土状況（西から）

外堀跡　セクション A-A’（東から）

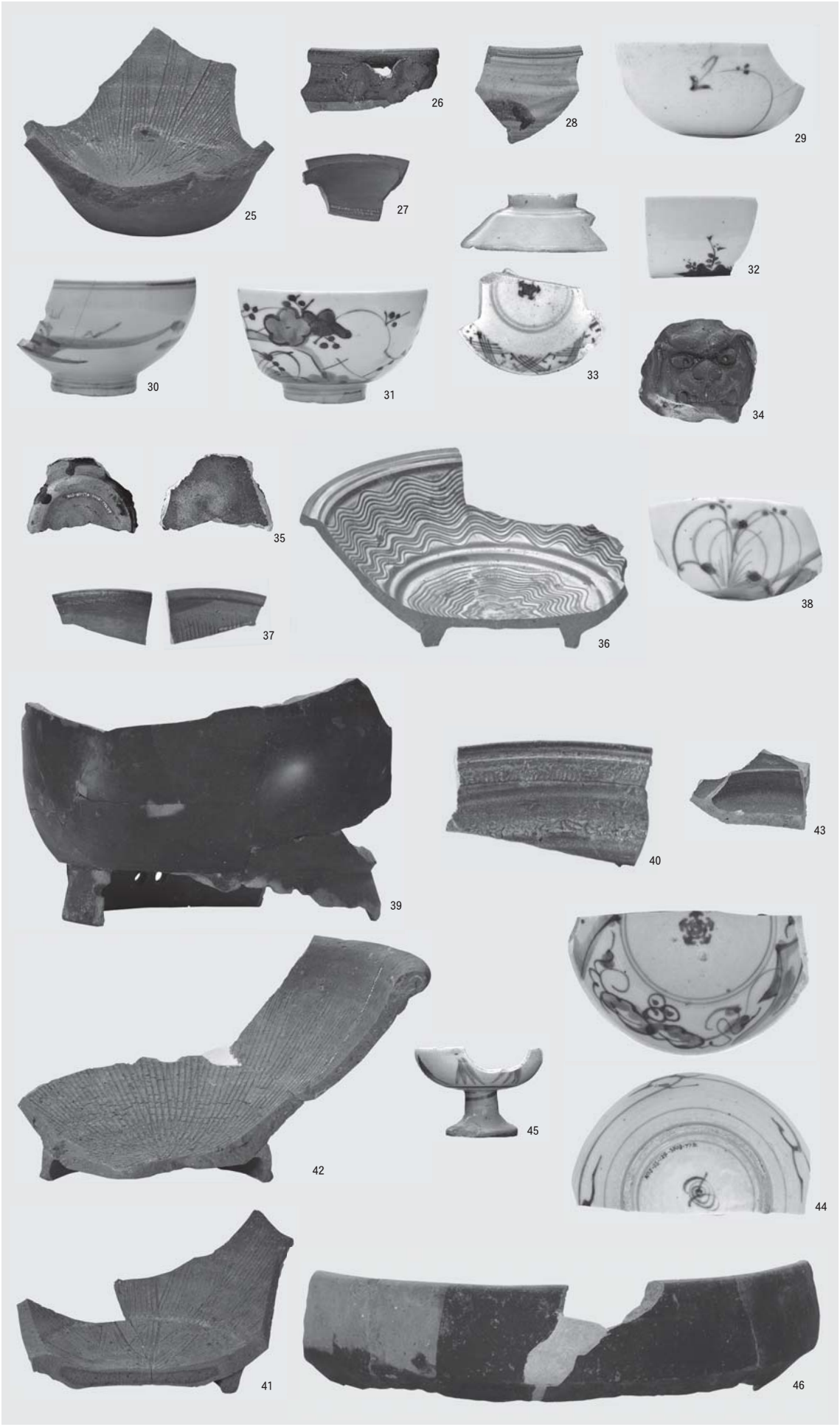
外堀跡　セクション B-B’（南から）

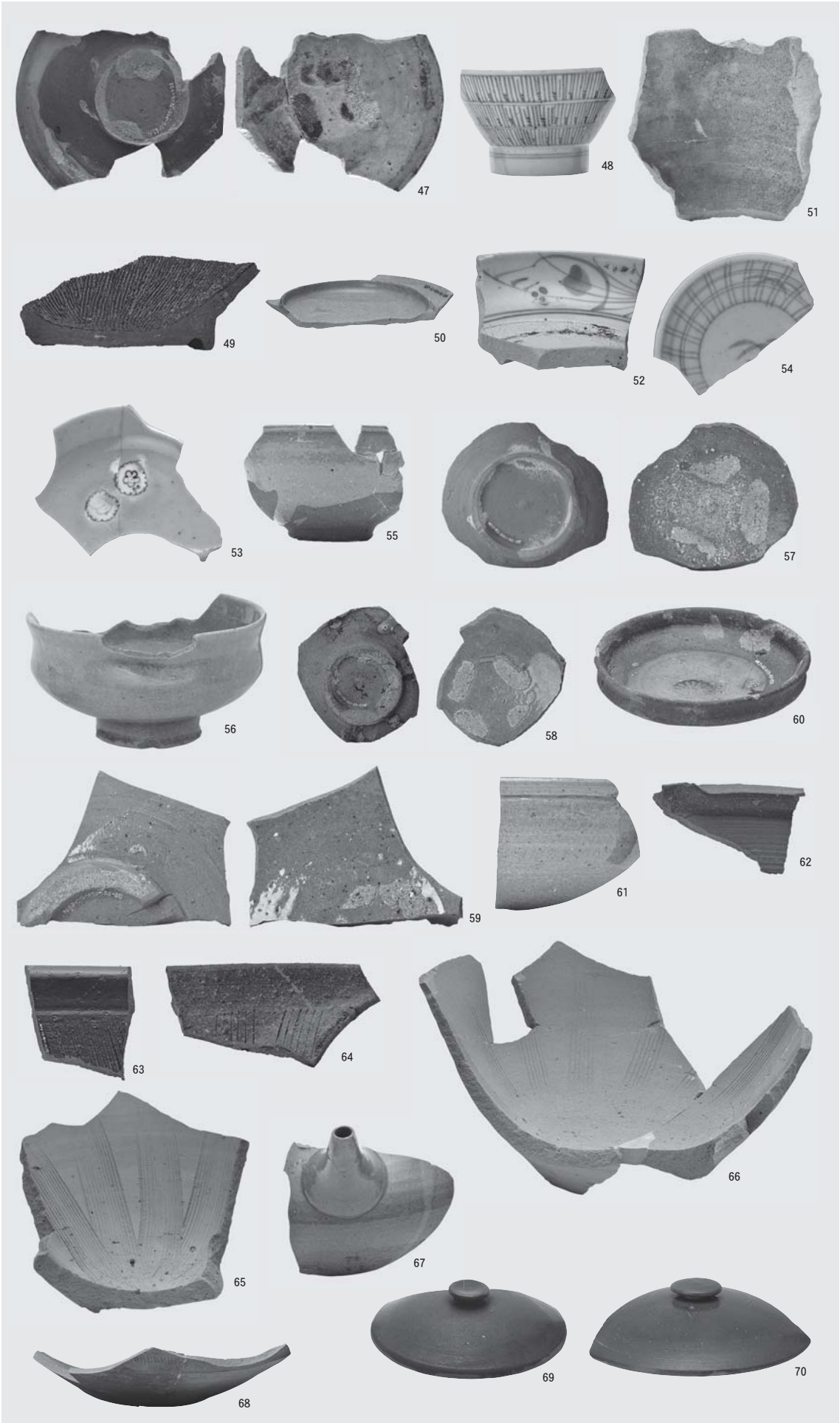

外堀跡　セクション C-C’（南から）

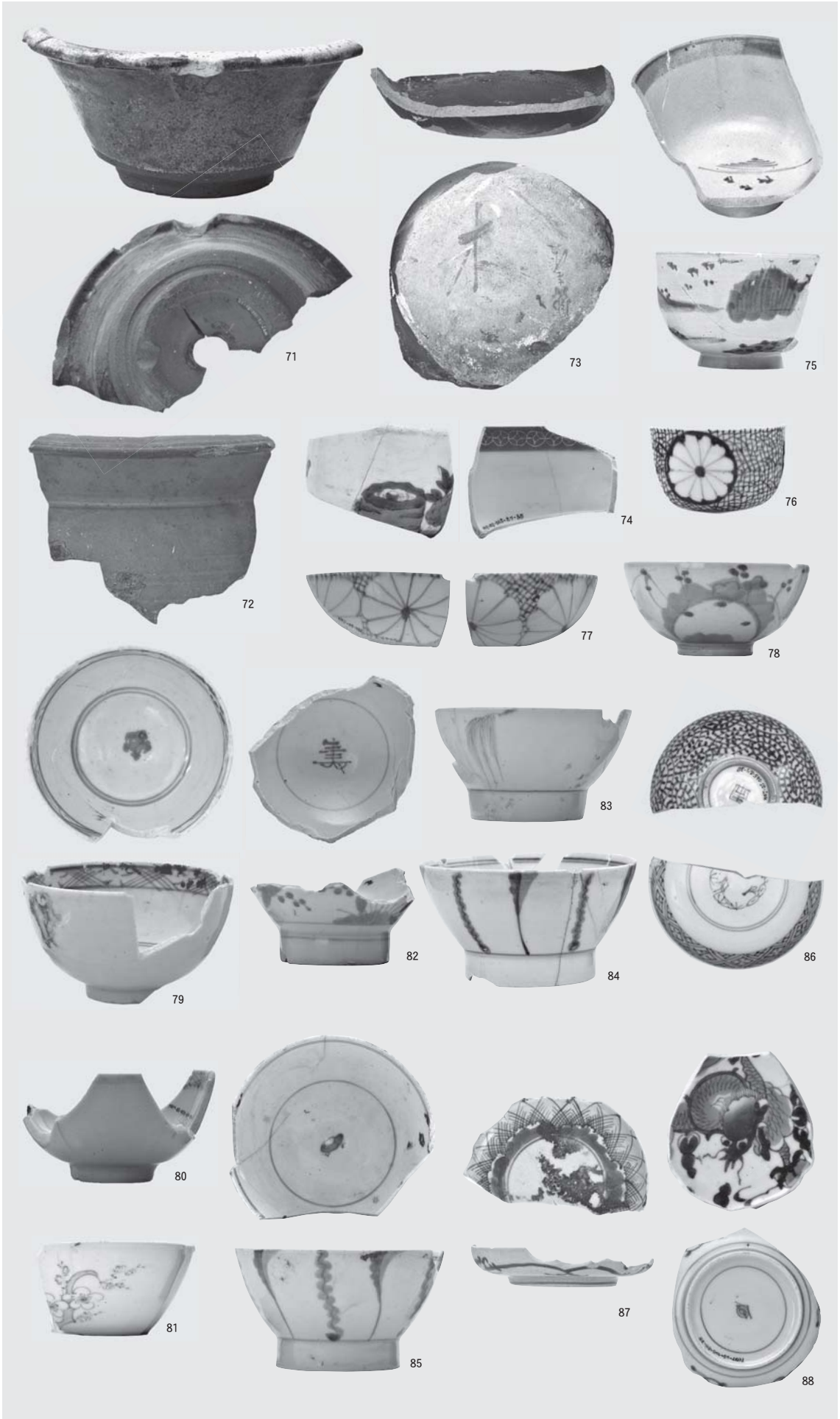
外堀跡　杭147・149（南から）

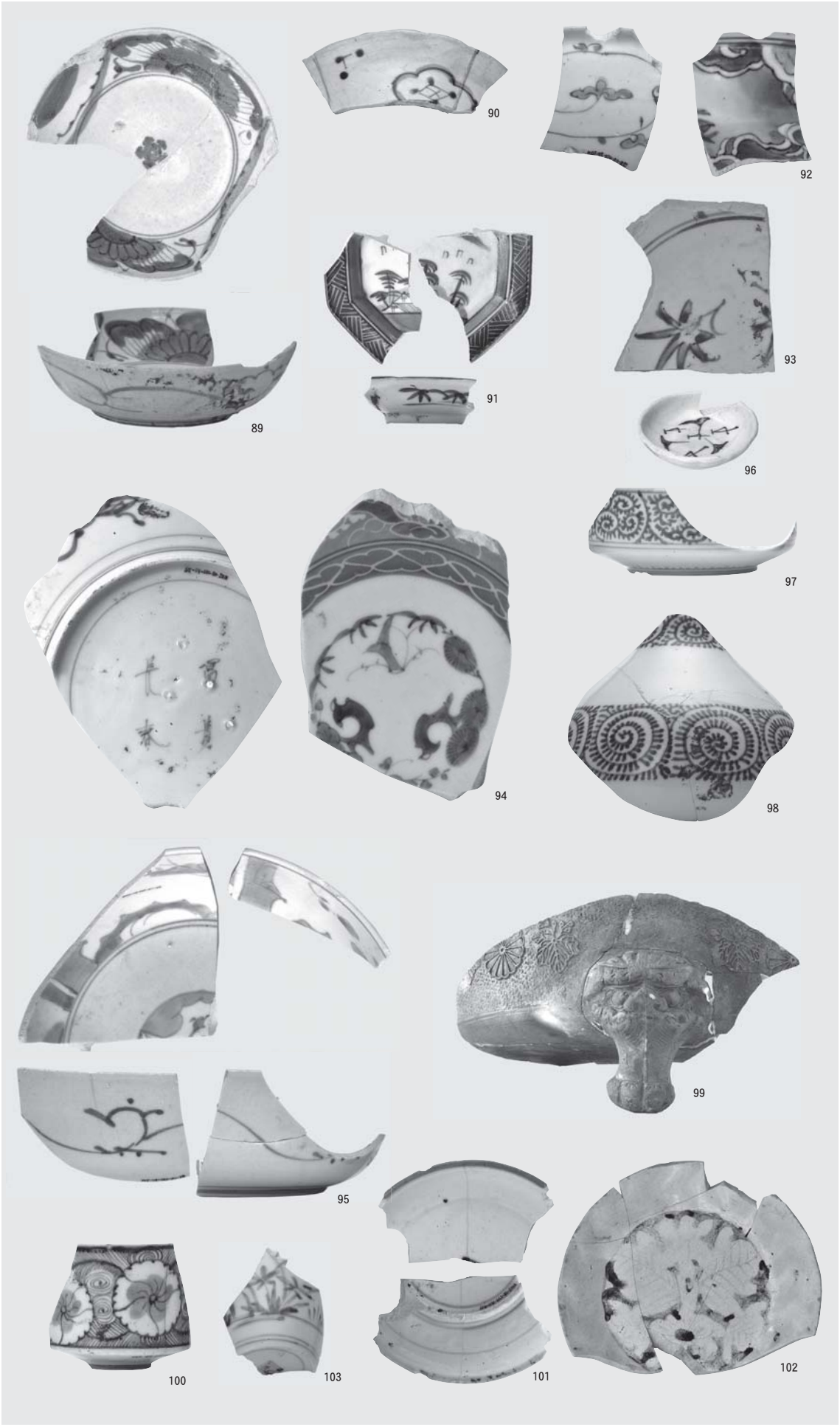
調査風景（北東から）

1
2
3
5
4
6
8
7
10
11
9
12
14
15
13
16
17
18
19
20
23
21
22
24

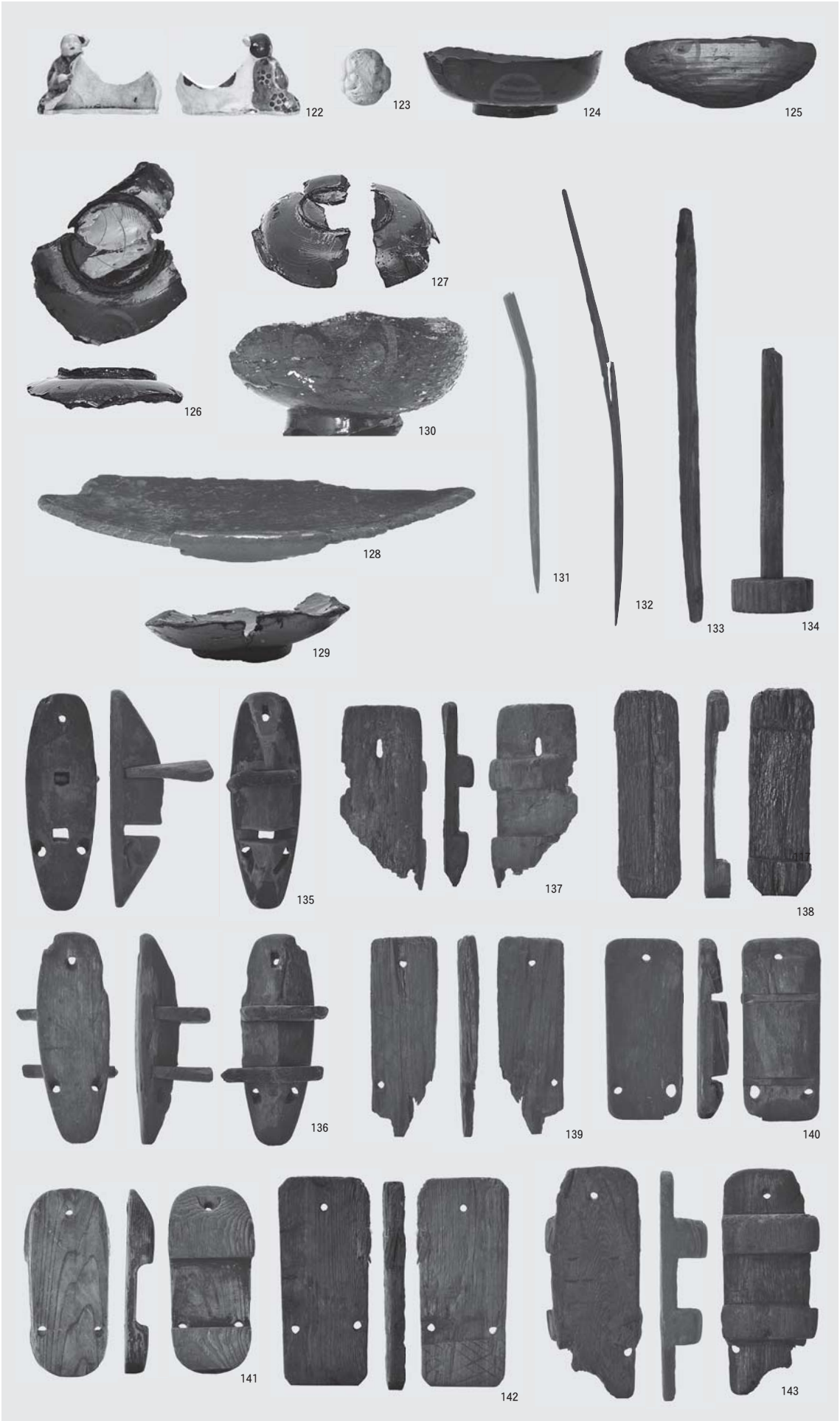

25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
42
43
44
45
41
46

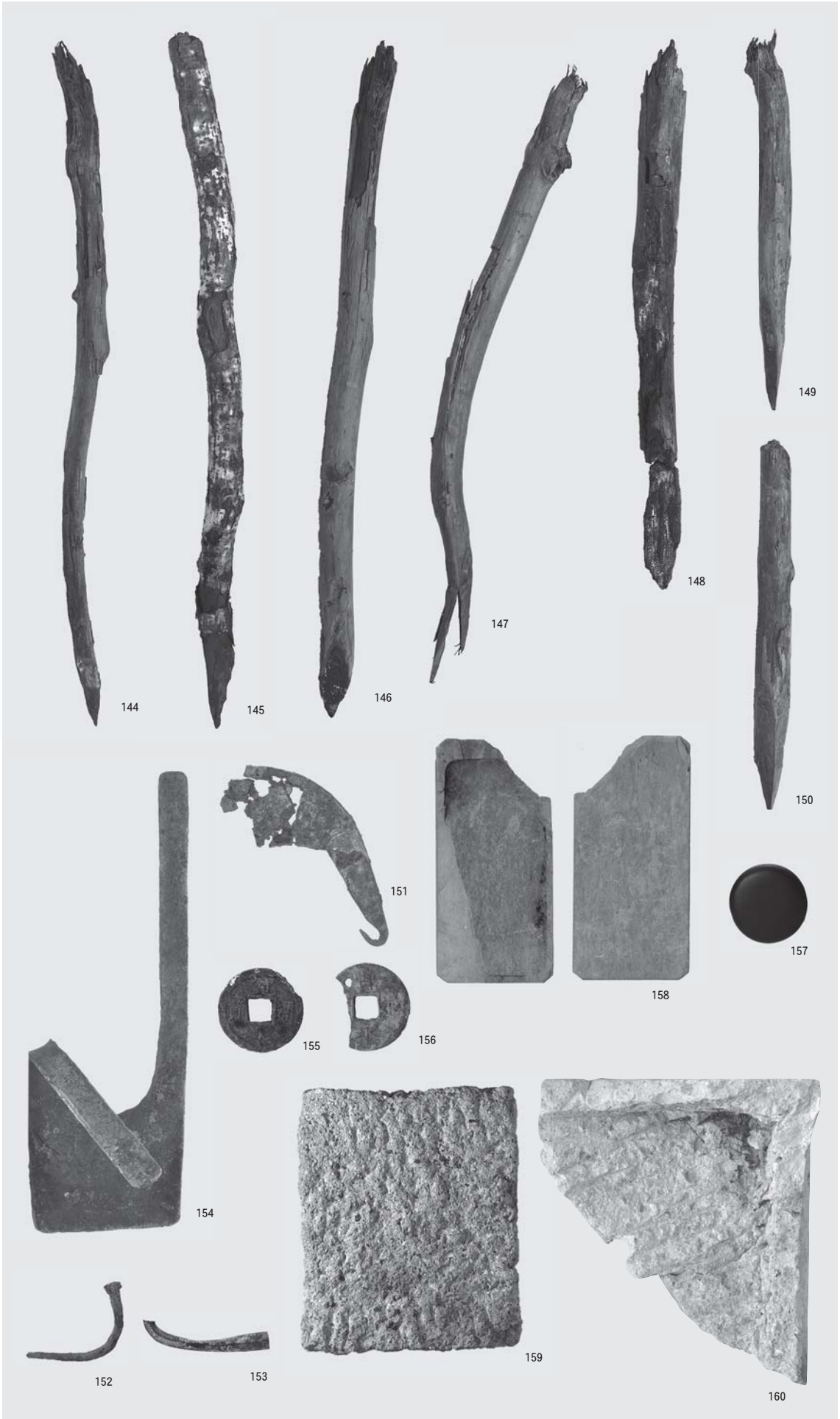

47
48
51
49
50
52
54
53
55
57
56
58
60
59
61
62
63
64
66
65
67
68
69
70


71
73
75
72
74
76
77
78
83
79
82
84
86
80
87
81
85
88


89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103

104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121


122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143


144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかじょうあと
書名	長岡城跡
副書名	大手通坂之上町地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	鳥居美栄　竹部佑介
編集機関	長岡市教育委員会
所在地	〒940－0084　新潟県長岡市幸町２丁目１番１号　　TEL0258－32－0546
発行年月日	2021年８月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ながおかじょうあと 長岡城跡	にいがたけんながおかし 新潟県長岡市 おおてどおり 大手通２丁目 ３番地９、10	15201	146	37° 26′ 55″	138° 50′ 54″	20210129 ～ 20210414	1,038㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
ながおかじょうあと 長岡城跡	城館跡	江戸時代	堀 土坑	近世陶磁器 漆器・木製品・杭 金属製品・石製品	

長岡城跡

大手通坂之上町地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和３（2021）年８月31日　印刷
令和３（2021）年８月31日　発行
発　行　　新潟県長岡市教育委員会
印　刷　　あかつき印刷株式会社